目次

統一團の使命（時言）……本多日生
教育勅語と思想問題……本多日生
本經祖書要文講義……本多日生
日蓮聖人教義綱要……井村日成
宗門史料……山根青村
改造運動と信仰……武田顯龍
記事報道十數件

第廿五年四月號

時言

統一團の使命

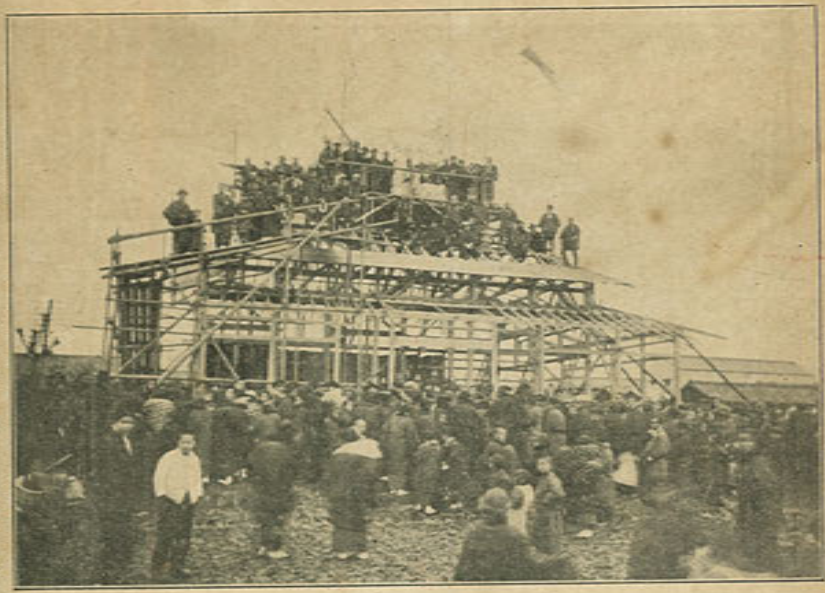
（一月十三日統一團落成披露會に於て）

本多日生

本日はこの統一閣の增築落成に就きまして、祝典法要を營んだのでありますが、私は御挨拶旁々我が統一閣の使命と題して、聊か所見を申上げやうと思ふのであります。

今回統一閣の增築を計畫致しましたのは、諸君の御承知の通り毎日曜の例會に於ても聽衆が入り切れないやうな事になつて參り、又修繕を加へねばならぬ所も段々出來たので、諸君の援助を受けて修繕並に增築の計畫を進めて參りました所が、幸にも諸君の熱誠なる淨財喜捨に依つて、收支缺損なくこれ丈の修繕と增築とが完成を告げた次第であります、この機會に於きまして謹んで御寄附を下すつた諸君にお禮を申す次第であります。統一閣は何れ今度增築をしましても凡そ一年か一年半の將來には又狹隘を感ずる樣になるのであらうと存じます。それは洵に目出度い次第でありまして、諸君と共に法運の發達を祝さねばならぬと存じます。

大正十年初頭に於ける新寺建立



上圖は大正十年一月十五日三重縣四日市市に創建せられたる顯本法華宗安樂寺上棟式。下圖は同年同月三十日北海道札幌區に創立せられたる同宗顯本寺に於て統一閣支部發會式。

統一團の使命をお話するに先立つて、統一團の創立及び從來の主張を聊か申上げて置かうと思ふのであります。この統一團の起りました直接の動機は、彼の格言問題であります、それは各宗に於て宗義綱要を編纂して、完全なる佛教各宗の教義を書いた書物を拵へやう、さうしてそれを原本として翻譯して歐米にも佛教の大要を知らすやうにしやうといふ計畫から進んで參つた、それには編纂の規則があつて、一人の手で筆を執ると自分の主義主張の方に引きつけるからして、何れの宗派もその宗派の信頼する人に筆を執らして、さうして編輯員は唯だページや紙數の都合を按配するのみで、中の論旨には決して手を下さない、さうしなければ眞宗の坊さんが編輯員になれば、日蓮宗の主張に於て自分の宗旨に衝突のある所を削りたくなるであらうし、日蓮宗の者が編輯員になれば又他の宗旨の主張のいけないと思ふ所を削りたくなるから、そんな事はしないといふ約束の下に、各宗の管長及び代表委員の集團として出來て居た各宗協會が、その編纂規則なるものを天下に公表して、各宗綱要を出版することになつたのであります。吾々の方の宗旨では私なり外二三の者が協力して綱要を編纂して、之を各宗協會に送付致しました、その中に私共の方で書いた主張に、日蓮聖人が佛教の紛亂を覺醒する爲に、所謂四大格言と稱して『念佛無間禪天魔』等を力説せられたことに依つて、頭の座にも据えられた次第であるから、この四大格言の一節を置いてその趣意のある所を明かにしやうといふので、それを書いたのであります。所が當時各宗綱要の編纂委員長が島地默雷といふ眞宗の坊さんでありまして、その人が「これはどうもいかん、念佛無間ナンといふ事を書かれては困る」といふので之を削却すると言ひ出したのであります。所がそれに就ては詳しく述べれば長い話がありますが、眞宗の坊さんが削却したのでは法華宗がこれに打つかつて來るから、自分が除いたのでは

ない、他の者が除いたのだといふ形式を作るべく企てまして、當時單稱日蓮宗の方からも綱要が出て居る、その中に四大格言が書いてないから、「これは載せても載せないでも宜いものでありませうナ」といふかと思ふ」と言つた。モウ一ッ陣門流と稱するのがやはり綱要を出して居た、古谷日新といふ人がその局に當つたのであるが、この方にもその事が書いて無かつた。そこで「どうです、斯ういふ事は無くても宜いのですか」と言つたら、「それはさうだ」と答へたとか云ふ事で、そこで四大格言を削却するは單稱や陣門に異論の無い事である、有つても無くても宜いものだといふ口實に於て之を削却せんとした。これはどうも非常な重大な事だと吾々は考へたのであります、唯だ眞宗の坊さんが自分の都合が惡いといふので、壓制的に之を除くならば未だしもだけれども、陣門流の方に照會をし、單稱の方に照會をして、「除つても宜しい」といふので削却したと聞きましたから、これは容易ならぬ事と考へて、當時單稱日蓮宗の管長小林日董師に面會をして、「格言が有つてもよし無くても宜いといふ事を答へられたといふが、それは眞實であるか」と尋ねた、所が「そんなやうな事をボンヤリ話があつたものだから、それは書き方に依るといふことは言つたけれども、今それが問題になるといふ事ならばどうもこれは無くてはならない、四大格言は日蓮主義の宗格として除くべきものでない」といふ事であつたから、「それではその通りの意見を書いてくれ」と言つた、所が管長の印鑑は宗務院にあつて、それを捺さうとすると面倒だといふことであつたから、「それは管長の印鑑でなくても宜しい、貴師の實印で宜しいから」といふことで小林日董師は、四大格言は日蓮聖人の主張の綱格であるから除く事はならぬと書かれた。それから當時丸山の本妙寺が陣門流の宗

務所でありましたから、其處にも行つて段々話をしまして、この方からも「それは除いてはいけない」といふ書付を取つて參りました。それから各宗協會に向つて、日蓮宗で除いて宜いといふ事を言はれたといふが、それは何かの間違ひであらう、この通り、「除いてはならぬ」といふ書面を受取つて來て居るから刪却することはならぬと抗議を申込んだ。所がどうしてもそれが載せられぬといふ、島地といふ人は隨分剛岸な人で、殊に自分がそれを除いた事に依つて門跡から褒められたとか云ふので、他く迄も強硬に刪却を主張しまして、遂に種々なる變遷を經て非常な闘ひになつたのであります。私はその際に、是は單に書物の上にそれを載せる載せぬといふ事ばかりではない、この日蓮聖人の四大格言の精神を明かにするは、自他に對して非常に大事なことである、一部日蓮主義者が四大格言を運用する上に於て、非常な固陋な排斥的な誤つた觀念もあることであるから、これは内輪に於てもこの觀念を直さんければならぬ、外も亦これに對して唯だ一概に惡口罵詈と考へ居るのは間違つて居る、日蓮聖人が身命を賭して主張したるこの格言の中には、動かすべからざる大眞理と護法愛國の大精神が包まれて居る、その點を明かにする爲に熱烈なる運動を起したのでありますが、それは諸君の記憶に新たなる所であらうと思ふ、それが爲に各地に演說會を開いた事は、何百回であるか分りませぬ、この運動が日蓮門下の護法心を刺戟した効果は多大であつたと信じて居るのであります。

その際にこの四大格言の問題を段々研究して參りますと、これは排斥的のものではない、『念佛無間』といふからと言つて、排斥固陋の方から出て居るものではない、これは内に於て言へば佛敎の解釋を統一するのである、佛敎は條然として一貫したる網格のあるものであつて、決して分裂的に衝突すべき敎ではない、初め華嚴の說法より終り涅槃の敎義に至る迄、釋尊一代の化導は、解釋の方針に依つては統一一貫の敎であるといふ事を明かにする爲に起つたのである。又之を國民敎化の方から考へれば、色々の宗敎を分立せしめて、敎義信條が違ふ爲に、家庭に不和が起り、民心に分離を生ずるは、決して健全なる國家を造る所以でない、成るべく國民の思想信仰は、大きな意味に於ての歸嚮統一を明かにしなければならぬ、それが日蓮の四大格言を叫んだ所以である、排斥の爲にあらずして統一の爲である事が明かにならんければ、自他共に日蓮聖人の大主張大精神を失ふことになるから、玆に「統一團」を創立するに至つたのであります。「統一」といふことは頗る大切な文字であつて、現在我國に横はつて居る思想の捌き方に就ても、この點が根本の問題であると思ふ、唯だ舊來の思想に閉ぢ籠つて、新しきものを一概に排斥する所の所謂保守固陋の考は、今後の思想界を導く所以ではあるまい、さればとて舊來のものを輕卒に打捨てゝ、屈從的に異邦の文明に憬れて行く態度も、これ亦國家の基礎を危ふするものであらう。それ故にこの思想問題の根本義は、開顯統一といふことに存する、過去に在りし所の文明の中軸を何處までも尊重しつゝ、新たに開發せらるゝ文明を攝取して行く事、この開顯統一の作用に依つて文化を導いて行かなければならぬと思ふ。統一と言へば日蓮宗の各派を直ぐ一つにしてしまふのか、佛敎のあらゆる宗旨を打つて一團とするのか、色々の宗敎を合併して一つにするのかといふ人もあるが、一つに成ればそれは結構だけれども、それは成らなくとも、主義主張として、何處までも開顯統一の理想を掲げて行く必要が存するのである。

統一團の本領は、日蓮聖人の主張せられたる敎義を最も嚴肅なる意味に於て承け繼いで、之を擁護し發揮して行く爲に組織せられた團結である。それ故に一面には日蓮聖人の主義主張を研究して、全く其處に

聖人の道統を傳承して行くことが、統一團の根本本領であります。又日蓮主義は活動的なる宗教であるから、運用の上に時處位を觀て、その運用を誤らぬやうにして行くことが非常に大切なことであります。從來の各派があるからして、その各派が日蓮聖人の道統を繼いて居るのぢやないか、各派には何れも宗務所があつて、其處で色々布教の事など研究して居るから、それで應用が適當に行きさうなものぢやといふお考への人もあらうが、それは行くてありませうけれども、行かぬ所もある。この道統と運用の大事は、唯だ書付を以てお前の方に付囑したといふやうな蟲の喰つた書付を振り廻して居つたり、或は御遺文の一節に閉ぢ籠つて變な理窟を捏ね廻はして、其處に純正の日蓮主義があるとか、其處に道統があるとか言つて、何か囚はれて爲にするやうな考へからやるやうなものは、決して道統を得て居る者ではない。佛陀の精神にしても日蓮聖人の精神にしても、そんな一人や二人が私すべきものではない。釋迦如來は自から經典の中に說いて居られる、我が教は滿月の天に輝くが如きもので、萬人仰ぎ瞻てその光に浴すべしと、又日蓮聖人もそれと同じやうに、我が教は決して一人二人が私すべきでない、日の東天に輝くが如くである、一句一節の中に閉ぢ籠つて、文の底に沈めたといふから、沈めた所を掘くつたら何か出て來るといふやうな、そんなものではない、一代の言動は如何にも正々堂々日の東天に輝くが如くに、天下萬人が仰いで鮮明に認められるのである。從來は色々の教團があつて、教義上の爭ひをした書物もありますけれども、私は大體それ等の論爭點は、餘り價値のあるものゝやうに思はないのであります、僅かの問題に引かゝつて分派をしたりなど致して、それからそれへと種々なる理窟をつけて居るけれども、寧ろ「詮索の學、如實智を生ぜず」と先輩が言うて居りますが、掘くり學問になつては、堂々たる日蓮聖人の精神は滅び去ると

思ふのであります。

日蓮聖人は種々に教を示されたけれども、併し所謂空言世に施すなくして、纔かな理窟を捏ね廻して居眠をして居る樣な宗教家とは撰を異にし、實際天下萬人を救ふ所の血あり力ある教を遺されたのであります。それにしては從來の各教團の態度は、どうも現在の社會國家人文を導く運動としては不十分なる點があると考へる、教義學說の上に於ても、一々此處に羅列しては申しませぬが、私甚だ滿足を表し兼るのである。現に私が管長を勤めて居ります顯本法華宗に就て申しても宜しい、他の教團の事は暫くお預りにしましても、私は顯本法華宗は正しき道統の傳はつた宗派だと信じて居りますが、その正しかつた顯本法華宗と雖も、種々なる弊害があり、間違ひが起つて居つた事を知つて居るのである、それを改善する爲に盡したる努力は少なからぬ事であります。私が自分一人のこの顯本法華宗に關しての改善の爲に盡した努力は容易でない。さればさういふ運動の起つて居らぬ他の教團に於ては、永い間の塵が積つて中々容易なことではなからうと考へて居る。そこでこの統一團は顯本法華宗に屬する譯でもなければ、又日蓮宗各派の他に一つの派を立てたといふ譯でもありませぬ、吾々は現に顯本法華宗に僧籍を置いて居りますが、併し囚はれざる所の正々堂々たる日蓮聖人の主義主張を擁護して、之を發揮しやうと努力して居る者であります、それが爲に若し顯本法華宗に於て壓迫する者が出て參りましたならば、或は獨立するかも分りませぬが、壓迫を防ぐべき權能を自分が管長として二十餘年間握つて居るから、この統一團なるものは壓迫を受けないのである、他の管長が權限を持つて居る時には屢々壓迫をされた、壓迫さるべき事は無いのであるけれども、正しい事を正しいとして主張をすれば壓迫をされるのである。他の日蓮宗の各教團に於ても、是を是

とし非を非として正々堂々と主張を立てゝ進んで行つたならば、必ずや壓迫される狀態にあるだらうと思ふ。統一團の過去の歴史が神聖であるのは、隨分壓迫も受けて吾々は僧籍を奪はれた時代もありますし、同志幾人か宗門放逐の處分を受けたこともありますけれども、正義を懷いて一貫して今日に至つた、その内に又時運が變つて遂に自分等が管長を勤めるやうにもなつて居るので、今度は反對に此方の正義に反する者があれば處分するといふことで、現に昨年處分した坊さんもあります、唯今でもこの正義に違反する者は、何時でも處分するといふ事で押切つて居る譯でありますが、併しそれは決してこの顯本法華宗そのものゝ仕事といふのではなくして、統一團の正義の主張で今日まで私は押切つて參つたのであります。

それではその正義の主張の中にはどういふ事が含まれて居るかといふと、これはどうしても法華經の三大教義の上に考へを有たなければならぬと思ふのであります。これは總ての宗教が其處に原則を置いて居るのでありますが、第一は宇宙を觀るところの見方であります、之を神が造つたと考へて居る者もあるし、又左樣な偉大な神も佛も無い、唯物的な宇宙だと考へて居る者もあるし、色々の宇宙に對する所の考が違つて居るのであります。而して一切の思想の根元は宇宙觀であらうと思ふ、續いては人身觀であるけれども、大きく研究すればどうしても宇宙觀である、その宇宙觀なるものが法華經に於ては最も正しく教へられて居る、釋迦が一代藏經を說いて、華嚴經にも宇宙觀を說き、或は圓覺經にも說き、般若經にも說き、樣々なるお經に於てそれ〴〵の宇宙觀を說明したけれども、其處に不十分な點がある、法華經に來つて始めて完全にこの宇宙を說明し、實相妙法の敎を法華經に留めて居るのであります。又佛敎歴史に就て考へましても、天台智者大師が出でゝこれを發揮し、又日蓮聖人がその意味を承け繼いで闡明せられたのが、佛敎

史に於ける一番完全なる宇宙觀であると吾々は信じて居る次第であります。所がこの宇宙觀の問題は、斯樣な場合に詳しく申上げることは出來ませぬけれども、そこに直ぐ現れて來る第二の問題は、その宇宙に存在して居る所の生命を有するものでありまして、その生命を有して迷うて居る者と、生命を有して悟つて居る者とが、宗敎の直接の問題になつて來るのであります。佛敎の言葉を以て申しますれば、九界の衆生と完全なる佛陀との關係であります。吾々はその衆生の側に居る者であるが、これはどういふものであるか、吾々人間は唯だ表面人というて居るが、實際法華經の敎を以て自己を領解する時にはどういふ工合に考ふべきものであるかといふ、この敎であります。さうして吾々の信ずる所の佛樣をどう考へるかといふ、この佛と自己との說明を法華經で與へられた、それを日蓮が發揮した、その說明をその通りに承け繼いで、その精神に心を從へて行くといふ事に於て、法華信者と言はるるのである。其處をグラ〳〵にしてしまつては本が紊れてしまふ。吾々が一體どういふ者かといふ事に就ては、十界是足の妙體とも言ひ、簡單に言へば吾々は偉大なる佛性を有つて居るから、その佛性を啓發して光ある生活に入り、所謂菩薩の行に入つて行き、さうして更に佛樣にまで進んで行くべきものおやといふ、この佛性と佛性の開發よりして菩薩行に入つて、遂に佛にまで進むといふ大向上を敎へて居る所のものが法華經である。唯だ病氣が癒るとか、死んだ者を回向するとかいふ、そんな粗末な事から起つた敎では決してない、法華經は非常に堂々たる敎である。さうして一方に佛樣を說明して、吾々が有つて居る所の佛性を現に顯して居らるるのである、さうしてその顯した時機が何時かと言へば、非常に古き始め無き以前の久遠よりして、その偉大なる佛が存在して居るといふ事を法華經の壽量品に於て顯本せられた。その意味が又非常に大切な事で、宗敎

にはどうしても本尊が要るのであるから、神を信ずるとか佛を信ずるとか、何を信ずるとか言つても、どうしても絶對の大人格者を一つ認めぬ限りには宗教は成立たない、唯だ冷たい所の眞理であるとか、妙法であるとか、理論であつては宗教とはならぬ、それは哲學である。宗教には絶對の大人格者があつて、その大人格者を説明する事の巧拙如何に依つて宗教の價値が分れて居るのである。基督教のやうに神樣を説明すればそれが基督教ナンである。天理教のやうに説明すればそれが天理教ナンである。この絶對無上の人格者があるといふことは、あらゆる宗教を通じて一つであつて、その説明の巧拙が即ち宗教の優劣を示して居るのである。所が法華經の壽量品に於てこの本佛を説明せられたのが、あらゆる宗教に於て説明して居る中に一番完全なるものぢやといふ事を信ずる所に、日蓮主義は起つたのであります。それが少しでも動いて、その本佛に對する所の意識が一點でも動いた時、吾々から言へば日蓮主義ではない、それは全く非日蓮主義である、日蓮主義の生命は、その本佛を完全に意識することに存するのであります。それが壽量品であり、それが開目鈔であり、それが日蓮一代の遺文の生命となつて居るのである、日蓮が窮寂にも造次にも忘れなかつたのはその本佛である、それは洵に鮮かである、その偉大なる大人格者を認めざる信仰は、宗教としては未製品であります。この佛性と本佛の二つに於て之を明かにして行くが、日蓮聖人の教を承け繼いで、所謂法統を傳受するといふ事になると私は信ずるのであります。その外に別に何か變な事を言つて、本尊の書き方が斯うぢやとか、あゝぢやといふやうな口傳相傳といふやうな事は、無くても宜いものである、本尊の相傳書を蒐めて出版されて居るが、碌な事は一つもありはしない、愚にもつかぬやうな事ばかりである、迚も日蓮聖人が力を入れて言ひさうでないことを日蓮の名に依つて傳へて居るのであるから、これは嗤ふ人百である。そんな物は駄目である、そんな物を勿體がるやうな囚はれた思想は全滅しなければいかない、モッと堂々たる所の主張に日蓮主義は歸らなければならぬ。例へば題目の南無妙法蓮華經の「華」の字を書いて、此方の方が虎の眼で、此方の方が龍の眼だなどといふ、それが虎と龍になつて見た所が詰らぬ事ぢやないか、そんな事を勿體らしく言ふて居る。それは一例でありますけれども、そんなやうな下らない事を日蓮主義者は掘ぜくる癖が隨分あるが、これはいけない、御遺文に現れて居る所の大精神を柔順に領解して、其處に動かない信念を確立すべきである。日蓮は自から言うて居る、

我が教は日の明かなるが如きものである、日出れば星隱る。

と、旭日を拜んで日蓮が宗旨を開いたのも、我が教は旭日の東天に昇つて日本及び全世界を照すが如きもので、萬人みなその光に浴せざる者は無いとの意味を示したものである。

この壽量品に於て説かれた本佛の思想は、簡單に申すことは出來ないけれども非常に立派なもので、これに依つて我が國體の神樣との關係も解釋されるのである。壽量品の思想でなければ阿彌陀樣と天照大神を比べては衝突するし、又大日如來などを持つて來て萬有神教で掻きまぜてしまふと、別に天照大神も有難いとはない、其處にかけてある帽子も同じ事ぢやとなつてしまふ、其處に危ない所がある、この壽量品の大教義からして顯本して、本佛應現の義を説明すると、實にそこに模範的なる思想がある。又一切の宗教の上に及んでもこの點が大事だと思ふ、世界の宗教の問題になつて居るのは汎神主義と多神主義と一神主義と、これ等の間に優劣を論爭して居るのであります。それで哲學の思想から言へば汎神主義で、總てのものは神に成り得るといふ眞理は、これは認めなければならない、所が總てのものが神になり得るとすれ

ば、神が澤山出來て多神主義に分裂をするといふことになる、多神的に分裂をすればどうしても宗教の價値が滅びて來る、汎神主義を認めなければならず、多神主義に陷つては困る。基督教の如く一神主義で行けば汎神主義が立たぬといふので、マゴ〳〵して居るのが宗教界の最高の議論である。所が法華經は前にいふ通りに、一切衆生にみな佛性を認め、總ての佛や神を認めて、而もその根本に統一の一大本佛を顯して、天月水月の思想を以て解決したのは、宗教學の上に於て實に異彩を放つて居るのであります。この本佛觀を正當に領解し得ないので、今の世界は壽量品の大教義に拜跪するだけの文明に達して居らない、次第にこれが開發して參つたならば「成る程壽量品の顯本の思想は實に偉大なものである、日蓮が開目鈔に叫びしが如くに、一切經の中に壽量品が無かつたならば、人に魂の無きが如く天に日月の無きが如きものである、或る程一切經の心髓は玆に在るナ」といふ事に感激するに至るであらう。私は飾らなく言ひますれば、この開目鈔の思想、壽量品の教義に感激しない者は皆僞物であるといふことを斷言する、如何なる狀態に日蓮主義を宣傳して居つても、本佛に感激しない所の者は、日蓮主義に於ては邪路に走せて居る所の人であります、それは如何なる方法に依つて闘つても宜いのである。私は今まで教義上の爭ひを欲しなかつたから申しませぬけれども、近來のやうに「天照大神が本佛で釋迦如來はその垂迹だ」といふやうな事を臆面もなくいふに至つては、これは許せない狀態であります。それは日本の神樣をも瀆すことであるし、釋尊をも瀆すので、兩方ともに瀆す事に相成ると信じます。日本の神樣は國家といふ範疇に於て絶對の尊嚴を維持せられて居るので、本佛は全宇宙に於て全法界に於て絶對の尊嚴を維持せられて居る方であります。それは佛教以外の人が、神道なら神道の立場から、釋迦は印度人であるとかいふやうな平凡な考へから、神道の神樣萬能の思想といふならば(それも同違ひだけれども)未だしもである、日蓮主義の名の下に左樣な事を宣傳するに至つては、私としては一言無かるべからずであります。それ故にこの統一團は微々たる團結ではありますけれども、今にしてこの統一團の主張が義へましたならば、日蓮主義は勃興しつゝあるが如くであるけれども、或は如何なる邪說が横行するか分らぬ世の中であります、舊來の教團に於ては種々なる塵が溜つて居るし、新しき日蓮主義者に於ては臆面もなく異端を主張する者が現れましたならば、新舊の弊に堪えずして、日蓮主義は勃興するが如くにして或は聖人の眞主張は滅び去る事にならぬとも言へない、この點は非常に警戒をしなければならぬと考へて居ります。唯今私の申す事は、何人も反對すべきではありませぬ、日蓮門下の何れの派に屬する人と雖も、この壽量品の思想なり開目鈔の思想に反對すべきものではありませぬ、けれども何故か其處が鮮明を缺くやうな事に相成つて居るのであります。

尙ほモウ一つ玆に申上げねばならぬのは、この主義を應用する點でありまして、これも日蓮聖人は明かに言はれて居るので、

千經萬論を習學するとも、時機相違しぬれば驗しなし。

と、どの位澤山書物を讀んで教義を明かにしても、之を運用する上に於て時を誤り方法を誤ると役に立たない。最も日蓮聖人はその時代を觀、その國家の事情を觀て、所謂人文と適當なる調節を取つてその教を活用せよと教へて居るのである。所が存外日蓮主義者には固陋なる弊風がある、妙な所に引かゝつて一人天狗と成るやうな者が澤山出來る、それから低級なる信仰に墮落して、まるで世の所謂一般迷信と同じやうに、

毒消の御祖師様とか、日限の御祖師様とかいふやうな事を言うて、様々なる低級なる迷信を鼓吹して居る。「これは一朝一夕には革まらぬからマアそんな事を言はずに置いた方が宜からう」といふ人もあるが、言はずに置いたら何時これが直るか、何時迄も直らぬぢやないか。それ故に彼等が何と言はうとも、兎に角我が統一國の主張としては、左様に日蓮主義を低級なる迷信に墮落せしむることは許さぬといふ立場を明かにしなければならぬ。又その解釋が餘り固陋なものになつて、七面倒な煩瑣なことをゴチャ〳〵言つて、時代人心に何等の必要も無い掘ぜくり學になつてはならぬ、これは時代後れとして攻撃しなければいくまい。モット活きた人間に適切なる教化を與へるやうに日蓮主義の運用を明かにし、百部經を讀むとか言つて、陀羅尼品を朝から晩まで「デビ〳〵ロケ〳〵」といふやうなことをやつて見たり、或は五重の塔を再建すると言つて十五萬圓も消費したり、そんな事は何にもならぬ、のみならずこれは罪惡である、日蓮聖人は左様な死んだ事を日蓮主義の名に依つてやることは、斷じて許してお居てなさらぬ。宗教が運用を誤つて左様な死んだ事をやる時には、それは罪になると明かに示されて居る。片海の圓智房が一字三禮の法華經を書寫し、一字書いては三遍立つて禮拜をし、法華經一部を寫し終つた、又毎日法華經を二部づつ讀んで、一生の間に何萬部といふものを讀んだ、所が日蓮聖人がこの圓智房を何と言つて居るか、御遺文の中にあるてせう、（種々御振舞御書）圓智房は必ずや地獄に行く、それも死んでから行くのではお前等信じまいが、死に際に地獄に行く相を現して、「左様なら地獄に行つて參ります」といふ事をちやんと明かにして行くといふ事が書いてある。所が不思議なことには圓智房は非常な熱病を患うて、今て言へば黒死病のやうな病氣に罹つて、死んだ所が身體が真ッ黒に焦げて居つた、焦げて居つたから地獄に行つたといふ證據にもならぬかも知らぬけれども、兎に角その時代の人は生きながらこの通り黒焦げになつたのであるから、これは地獄に行つたに違ひあるまいといふ事が御遺文の中に書いてある。假令法華經を一字書いては三遍禮拜をするといふやうな事をしても、時代に適合した運用てなければ役に立たぬといふことが、日蓮主義の一大特色てある。その點を能く考へて、今日て言へば日本の思想界が兎に角いろ〳〵な事に依つて動搖を來して居るのてあるから、日蓮聖人が

法を知り國を思ふ。

と言はれたこの志に副うやうに、日蓮主義者は國民思想の善導に向つて一斉に力を盡さなければならない、唯だ詰らない八封見の出來損ひや、灸點師の出來損ひ見たやうな事をやつて、迷信の仲間入をして居るといふことは日蓮門下の志てはあるまい。日蓮聖人が立正安國論を書いて「先づ教を正さんかな。」と言つたのは、今日の一般日蓮主義者が考へて居るやうな遣り方てはあるまい、今の所謂國民教化の問題てあらう。この國民の道德心なり國民の宗教心なりに就て、民心を指導啓發する上に、日蓮主義者は模範を以て立てよといふが、日蓮聖人の大教訓てはなからうか。

さうしてその奥には非常な熱烈な信念を有ち、この信仰の母より善き子供を産み出し、その子供としては第一に國民道德の上に確乎たる力を與へて行くべきてあり、「法を知り國を思ふ」といふは、この點に存する、日蓮主義の信仰は直ちに愛國の精神となり、時弊を救濟する運動に就くことが、何時も變らぬ日蓮主義者の本領てなければならぬ、これが今日は餘りに低級になり過ぎて居る、之を醒さなければならない。殊に東京の日蓮主義者は最も低級に墮落して居る、日本中を通じては日蓮主義は斯うてもありませぬ

けれども、東京の日蓮主義者は實に低級なる迷信の人が多いのであります、故に特に東京に於てはこの信仰の墮落低劣に流れて居るのを警めて、日蓮主義運用の上に時代適應の活動を起さなければならない。我が統一團は微力にして、無論その活動は思ふに任せぬけれども、健全なる文明建設の運動の中に協力して進むべき團結でなければならぬと考へて居るのであります。唯だ一人よがりの事を言つて、勝手なことをいふやうな事があつては、日蓮聖人の思召ではなからうと思ふ。

それ故に統一團の使命として根本の問題を敍へますれば、日蓮聖人の教義に於て最も正しい所の法華經の精髓を引提げて立ち、その運用の上には時代を救濟する所の適當なる活動を起し、各宗に對して攻擊の鉾を向けても決して狹隘固陋の態度を取つてはならない、正々堂々と國民思想の歸嚮統一といふ大きな問題からして日蓮主義は闘つて居るのであるといふ事を明かにして行かなければならぬ。小さな問題に入つて、互に相爭うて、「お前の方で南無阿彌陀佛、六字の名號といふならば、此方は五字の妙法蓮華經だ、一字此方が少ない」といふやうな事をいふ、私共が書生の時分には大分さういふ議論があつた、六七碩異辯といつて向ふからは「六字の名號と七字の題目とは、念佛の方が一字易いぞ」といふ、さうすると今度は五六碩異辯といつて「そつちが六字なら此方は妙法蓮華經の五字で一字少ないから樂だ」といふ、さうすると向ふの方では「それは南無を附けるから六字になる、お前の方で南無を除るなら此方でも除る、阿彌陀佛の四字ぢや、やつぱり此方が一字易い」といふやうな事を言つて爭つて居つた。其處で昔の狂歌に

四字と五字とがくじになり
一字の事で住持迷惑

といふのがある、これは實に當年の固陋なる折伏の餘弊を語つて居る。さういふやうな古い型はスツパリ捨てゝしまつて、公明正大な精神からこの國を思ひこの道を愛し、この人を愍れむといふ所の堂々たる精神を持し、國民教化の大義を提げて、折伏の論鋒を進めて行くことにしなければならぬのである。我が統一團は及ばずながらこの意味を明かにする點に使命があるので、それ故に「統一團」といふ名を存して、そのやり方を一つ模範的に示して見たいと思うて居るのであります。無論不十分なる點はありますけれども今後諸君と共に努力して、教義の上にも運用の上にも、日蓮聖人の正義を傳へて行くやうに致したいと考へます、希くは諸君と共に奮勵努力を誓ひたいと思ふのであります。南無妙法蓮華經

教育勅語と思想問題

本多日生

私の拜しまする所では多々德目が擧つて居りますが、先づ二十一ほど數へ得るかと思ひます。(1)國を肇むること宏遠、(2)德を樹つること深厚、(3)克く忠に、(4)克く孝に、(5)億兆心を一にし、(6)世々厥の美を濟す、(7)兄弟に友に、(8)夫婦相和し、(9)朋友相信じ、(10)恭儉己れを持し、(11)博愛衆に及ぼし、(12)學を修め、(13)業を習ひ、(14)智能を啓發し、(15)德器を成就し、(16)公益を廣め、(17)世務を開き、(18)國憲を重じ、

三、教育勅語の德目と其の分類

そこで第二段に移りまして、教育勅語の德目とその分類に就て申上げて見たい。それは第三段の議論を進め行く爲の準備として、この教育勅語の上にお示しになつて居る德目を數へ、これを倫理の主義、思想の上に分類致して進んで行きたいと思ふのであります。

(19)國法に遵ひ、(20)義勇公に奉じ、(21)天壤無窮の皇運を扶翼すべし、二十一であります。この一々の德目に就て聖旨の在る所を申上げたいと思ひますけれども時間に限あることでありますから、德目は二十一と數へて置きまして、是がどういふ種類になるかといふことを觀たいと思ひます。

私はこの勅語の中には初めに申した通り、日本の國民としての道德といふ事だけではなくして、第一に國家の天職理想が明かに示されて居ると思ふのであります。それは

國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ

と仰せられたのは、我が大日本帝國の天職とその理想とをお示しになつて居ると思ひます。「宏遠」といふは舊く長い事と宇ては思はれますけれども、過去の時間の永いことは、未來に又天壤無窮の永き時間を有つてお居てになることを意味する、これは唯だ時が永いといふのではなくして、時の永いのは大きな仕事を爲さるといふ事を意味する。「悠久は物を成す所以なり」と中庸にあるが如く、又法華經に於て釋迦如來は久遠實成の如來であるといひ、如來は常住にして滅せずと說かれしは、本佛の大活動がその中に示されて居るのであります。國を肇むること宏遠に、天壤と窮りなく續きたまふといふ事は、偉大なる事業を達成なされることを示してあるので、即ち我國の天職が時間の言葉で示されたのである。法華經に、佛は常住である、「我れ佛を得てより來經たる所の諸々の劫數無量百千萬億載阿僧祇なり」と云つてあるやうな風に、國を肇むること宏遠にといふのは、非常なる大活躍を意味して居るのであり、それは建國當時の理想が鮮かに示されて居るのであります。

それから「德を樹つること深厚」といふ、この我國の德がどれ程深く且つ厚いものであるかといふ事に相成りますと、この「深厚」の二字に於て樣々なる

意味を解釋しなければならぬと思ひます。即ち一は天業を恢弘し、一は天下を光宅する、一は國家を經營するといふやうな事て、實に宇宙的の觀念も、この「德を樹つる深厚」といふ中にあるのてあります。神樣の聖旨を奉じ、國民は敬神の觀念を有つて、天と俱に事を爲すといふ精神――儒教て申せば天道明德の意味合、佛教て申せば佛と與に在り、佛と俱に進むといふ所の精神が、日本の國民には根本よりあるのてあります。「正直の頭に神やどる」といつて日本國民は皆神を戴いて奮鬪して居る所の國民てあります。それは決して迷信的てはありませぬ、神の清き精神を戴き、神の偉大なる力我れに在つて奮鬪するのてある、絶對我に左り、宇宙の大精神は國民個々の頭に在りといふのが、大和民族の覺悟てあります。それ故にそこに宇宙的なるものがあり、又世界的には天下を光宅するといふ大理想があるのてあります。日本人の頭腦――大和魂を分解すれば、普に我が國家を思ふのみてはない、往いては天業に參加して世界の人類を救濟する所の大事業を爲さなければならぬ。今直ちに爲すことは出來ぬが、往いては日は東より出てて西を照すが如く、天下光宅の事業を達成するものてあるといふ、宇宙的世界的の理想を我が國民は有つて居る譯てあります。

さういふやうに色々あります。その色々ある所の道德の總てを調和統一するのが「深厚」といふ事てある。國家あるを知つて世界あることを忘れたり、現在あるを知つて理想あるを忘れたり、生活の必要を認めて宗教の信仰を忘れたりするやうな事ては、德を樹つる深厚とは言へない、德を樹つること薄つぺらてあり、偏つて居ると謂はなければならぬ。「深厚」といふ事は、今の教育界にて解釋をするやうな事は眞の「深厚」の本意に反いて居ると私は考へます。片々たる所の偏よつた事を考へて居つて、何て「深厚」といふ事が言へるか、儒教だけも說けんぢやないか、多くの教育家が考へて居るやうな事ては、「天道明德」といふても、天道といふ事が分らぬぢやないか、分らぬと云つたら失敬のやうだけれども、事實分るまい。「天地の公道に基くべし」と宣はせられた天地の公道とは何ぞ。天地神明に誓はせ給ふといつても、そのやうな事は要らぬ事ぢや、唯だこれは言葉のあやだと思つて居りはしないか、敬神宗祖の訓令が出るといふのは、さういふ事が分らぬのみならず、さういふ事が無くなつて居たからして、少しは氣を附けよといふ事になつたのてあらう、斯樣な訓令が出る所以は、無かつたことを證明して居る、それてあるから天道といつても、「飛行機の通る所か」位のことて、分りはせぬ。それは宗教を侮蔑するが爲に道德の根抵が破壞されて行くのてあります、それて「深厚」といふことは言へない。まだ〳〵深厚てない事は幾らても證明が出來るけれども深厚の方を證明することは餘程困難てある。それは甚だ奇激な言のやうてあるけれども、眞理の示す所已むを得ぬ次第てあります。

又第二に國民的道德としては最も鮮かにお示しになつて、即ち「克く忠に」、「億兆心を一にして世々厥の美を濟す」――「一心協力、六千萬心を一にして進むといふこと、或は「義勇公に奉じ」「皇運を扶翼する」といふが如き、その他國民の道德としての意味合は明白にお示しになつて居るのてあります。それはモウ鮮かな事て、この點に於ては問題の無いことてあります。

又家庭的道德も皆理解して居る事て、「克く孝に」「兄弟に友に」「夫婦相和し」といふことは、親子の間には慈孝を敎へ、兄弟の間には友愛を敎へ、夫婦の間には相和することを敎へられて居るので、家庭の道德も洵に鮮かてあります。唯だ孝ばかりてありませぬ、兄弟も夫婦も皆敎へられて居る。即ち日本の國民道德の最も大切な家庭道德として、親子の關係

兄弟の關係、夫婦の關係、主從の關係が一々茲に示されて居るので、家庭道德の基本が明かである。

それから社會的道德はどうかといふと、是も頗る明白に現れて居ると思ふ。それは即ち「博愛衆に及ぼし」といふ事であつて、社會を構成する所の原理はこの言に盡きて居るのである、社會構成の原理は、「博愛衆に及ぼす」といふ言葉以上には、如何なる學者、人物が調べても示すことは出來ない。それから「進んで公益を廣め」、「世務を開き」、「國憲を重じ」、「國法に遵ひ」といふが如き事柄は、皆な社會の大事なる點である。即ち一つの社會を作る以上は、是等の事は安寧秩序を維持し、公利、幸福を進める所以であつて、社會構成の原理をも、社會の幸福を實現する方法をも、一切お示しになつて居るのであります。唯だ國民道德といつて國家觀念ばかりのことではない、社會構成、社會相互の道德が明かに示されて居る次第である。

それから人道的道德はどうであるかといふと、是も私は頗る鮮かなことであると思ふ、「博愛衆に及ぼす」といふは、唯だ社會に於けるのみでなく、人類全體に對しての德目であり、又「公益を廣め世務を開く」のは、文明の惠澤を共にする所以で、文化の進歩に依つて相互の利益を進むるのであります。初めに申した「德を樹つる深厚」といふ中に元下光宅の理想があり、又「國を肇むる宏遠」といふ中に最後人類の幸福を保障する所の理想を有つて居るのであります。それ故に人道的の道德としては、「國を肇むること宏遠」、「德を樹つること深厚」、「博愛衆に及ぼし」、「公益を廣め」「世務を開く」といふ所の、この聖旨を擴充して參りましたならば、人道的の道德も鮮かにお示しになつて居るのである。

又人格的道德としては是れ亦頗る鮮明でありまして、「恭儉己れを持し」「博愛衆に及ぼし」「學を修め」「業を習ひ」といふやうに仰せられて居る、この學を修めるといふ事も、唯だ今日のやうな機械的學問を指されたのではありますまい、斯の「修學」といふは「修養」を指してあるので、又「智能を啓發し」「德器を成就」するといふことも、人格を造る所以であります、是等の文意に依つて人格修養の方針は明かになつて居るのであります。國民を造つて人を造らぬといふやうな事は何處を押したら出て來るのか、實に可笑しげな事を言うたものであります。

但し茲に於て大事な問題が殘つて居るのは、宇宙的の方面と、いま一つは人格の基本といふ根本問題であります。この宇宙的の方面と人格の基本は、唯今私の解釋した所にもありますけれども、それは「國を肇むる宏遠」といふお言葉である、所がこれを教育家が解釋すると、「日本は建國以來何千何百年經つて居るから世界の何れの國よりも舊い國ぢや」と斯う唯だ言つてしまひます、舊いといふだけでは宇宙的の道德は出て參りませぬ。德を樹つる深厚といふことも、「深はふかい、厚はあつい」といふ字で立派といふ事ぢや」と言つただけでは、宇宙的の道德は出て參りませぬ。モウ少しその意味を開發して御研究にならぬといふと、折角の勅語もその趣旨が開發せられぬ次第でありはしないかと思ひます。

茲に宇宙的の方面を「宏遠、深厚」といふ事に依つて解釋するに就ては、少くとも二點の注意を要する。一つは我が皇祖皇宗を宗教の神とするに於て濫りに迷信を鼓吹し、俗神道を打立てゝ、天理教の如く、大本教の如く、低級なるものを我が皇祖皇宗の名に於て亂用することは、國家として、嚴禁して宜しいことであります。國民一般が億兆心を同じくして尊敬しなければならぬものを、あのやうな迷信團體の方に於て、こつちが皇道の大本ぢやとか、本家ぢやとか、聞いて呆れるやうな事を言ふのであります。是れは實に甚だしいことで、俗神道の行爲は我が國體を瀆す所の罪人であります。それからモウ一つは

宗教は自由であるから、是れは教育が干渉してもいかぬ、政治が干渉してもいかぬ、日本の神様といふものは全然宗教に關係がない、國を開かれた御先祖といふことだけで、別にそこに行つてお禮りをするのではない、頭を下げるのも帽子を取つてこの邊まで下げるのである、何度の角度に下げるのであるといふやうな事を言つて、純乎として純なる渇仰の精神を我が敬神の觀念より除き去らんとするが如き事を、言譯として言つて居るのである。それは耶蘇教の人から突込まれる時の答辯として、日本の神様は宗教でないといつて通げて居るのである。大本教のやうな迷信に行くのも宜しくないが、日本の神様に對し宗教的氣分を捧げるのを、之を僞つて言譯せんならぬ役人も、是れ亦氣の毒の至りと謂はなければならぬ。モット正々堂々、日本の皇祖皇宗に對しては宗教的氣分があるけれども、是は一般宗教とは違ふ、大體宗教的氣分とは一切の道德の生粹なる所に於ては凡てに存するのである。親孝行と雖も、親が有難いといふ感激精神の極まる所は宗教的なるものである。夫婦の愛情と雖も、朋友の信義と雖も、軍人が戰場に出でて忠節の心に生命を捨る場合にも、その最後の純忠至誠のそこは宗教の氣分に入つて居るものである。道德と宗教とを全然區劃を明かにせんならぬと思つたのが、抑々この間違ひである。何もそんな窮屈な事を言ふことはない、道德と宗教とはその根抵に於て相接壤して居るものであつて、互に相交叉し、重なり合つて居るのであるから、「此處までは宗教ぢやから要らぬ」と言つて斷つたとき、そこに道德の根抵は筍の根を斷られたと同じて、遂に生氣を失ふて萎びてしまふ譯ぢや。宗教を斷つて捨てたと思ふ時、道德の根を斷つて居るのて、それは非常な間違てある。

試に諸君考へて見給へ、儒教の方に於ては道德の根抵を何處に置いたか、孔子は天道にお置きになつて居る。それ故に或る弟子が、「先生、あなたの道德の手品の種は天道てございますナ」と言ひました時に、孔子は、天豈言はざらんや――天が大きな聲て言うて居るのが聞えぬか、四時行り萬物生る――春夏秋冬の四時の大規律はこの通り運行して、千歳を經て少しも違つたことはない、又萬物は生々化育してこの通りに凡ての物が天の惠の中に活きて居る即ち天はすべての物に規律を敎へ、生々化育の慈愛を與へて居るのである。斯の如き規律と慈愛とに服從し感謝する所が道德の根抵てある、この服從と感謝とを除つては道德は無い。今の西洋で言やうに、自主とか權利とか要求とかいふ事が道德だと思つて居るとき、人類の幸福は破壞されてしまふのてある。慈愛に活きずして不平を懷き感謝を捧げずして不滿を懷き、すべての事に反抗の氣分を煽るとき、即ち人類の社會は破壞されて行くのてある。德目は種々あるやうぢやけれども、根本になるものは確乎不拔の規律に遵はなければならぬといふ事てある、火を握つたら手が燒けるから、危ないッと言つて止める。それを「止めなくても宜いぢやないか、俺が勝手に手を燒くのだから……」「さうぢやない、手が燒けてしまつたら字も書けなければ、飯も食へなくなる」「構ふものか、俺の勝手だ」……それは精神病院へ入れてしまはなければならぬ、天則には遵はなければならぬ、遵はない者には從ふべく命ずる所が道德の命令てある、道德だつても命令ぢや、法律て命ずるも道德て命ずるも同じことてある、「斯くあれよ」といふのが道德てある、それに從はなければ道德といふものは無い。然るに服從を非常に罪惡の如く言うて、ヤ忠孝道德は屈從道德ぢやとか、舊弊道德ぢやとか、ワイ〳〵言つて居る。權威と慈愛とに遵へといふ事が即ち天道てあるから、どうしても宇宙法に繫がらなければならぬ。

端を夫婦に發して峻として天を極む。

と孔子は言うて居る。夫婦間の關係も段々推して行くとやはり天則に則つて、即ち夫は天であり妻は地である、天地位して萬物育するのである、天ありと雖も地なければ一草一木も生じない。故に天皇を乾德に比し、皇后を坤德に比し、乾坤天地の德を以て夫婦に象るので、孔子は『端を夫婦に發して峻として天を極む』と言うて居るのである、道德は宇宙法を離れては根據が淺くなるのであります。

モウ一つは明德の側でありまして、是は孟子が非常に力說して、即ち性善を確立せざる限りには、道德の基準が立たぬと論じました。又佛敎で申しても佛性の有無が喧ましい問題となつて、佛性を備へて居ることを說かない敎はこれを小乘と稱して居ります。今の敎育家はこの明德と云ひ佛性と云ふをどう考へてお居でになりますか、德器を成就すると言つた所が、成就すべき根本を明かにしなければ成就しないぢやありませぬか、成就するといふ字の講釋をするだけならば、何でもない話である。どうしたら人間が德器を成就し得られるかといへば、人間の本性を明かにして、玆に儒敎で申せば明德を明かにしなければならぬ、佛敎で申せば佛性を開かなければならぬのであります、我國で申せば即ち和魂の發揮に努めなければならぬのである。敬神の觀念と和魂を磨くことの爲めに、鏡を向ふに置いて、鏡の如く汝の心を磨けよといふが、我が惟神の敎である。學校の敎育に於ては、汝の心を鏡の如くせよといふ意味を敎育勅語の何處から御紹介になつて居りますか。軍人への勅諭には、誠心を開かなければ克く忠に等の精神も役立たぬと仰せられて居ります。軍人への勅諭の五箇條は第一が忠節である、忠節とか武勇といふやうな事を、今の學校では盛んに說かれて居るが、その根本に一つの誠心が無かつたならば、五箇條は役に立たぬとある。『一つの誠心は五箇條の精神なり、心誠ならざれば如何なる嘉言も善行も皆表面の裝飾りにて何の役にかは立つべき』――黑板の前で幾ら嘉言善行を說いても、誠心を啓發しなければ『うはべの裝飾にて』――即ち敎育が形式化して、「何の用にかは立つべき」――役に立たぬのぢや。さてこの誠心を開くにはどういふ工合に敎育されて居るか、黑板の前の講釋だけで誠心が開かれるものではあるまい。儒敎で申せば天道明德といつて、天道を敬ふとき明德が眼を覺すのであり、惟神道で申せば敬神の觀念のそこに和魂が開かれる、佛敎で申せば本佛を渴仰するとき佛性が目を覺ますと敎へて居るのである。佛敎に於て本佛を斥け、儒敎に於て天道を斥け、神ながらの敎に於て敬神の誠意を斥けたとき、何に依つて人の誠心が開かれるか。先帝陛下も仰せられて居る、

目にみえぬ神にむかひてはぢざるは
人の心のまことなりけり

目にみえぬ神のこゝろに通ふこそ
人の心のまことなりけれ

くもりなき人の心を千早ふる
神はさやかに照しみるらむ

神に向ふた時人間の誠心が開かれるのである。そこに宗敎的の敎化が缺けたとき、人間の誠心は開かれない、誠心の開かれない時德器は成就しない、德器が成就しないとき、敎育の目的は達せられないではないか、形式だけで濟ますといふことになる。それ故に成立宗敎を奉ずることは別としても、道德の根柢には宗敎的の要素が存することを知らねばならぬ。

それ故にこの意味を敎育勅語の何處からお說きになりますか。私は「恭儉己れを持し」といふ「恭」の字は、儒敎で云へば天道を敬ふ誠敬であり、惟神道で云へば神を敬ふ眞心であり、佛敎で云へば佛を渴仰する信心から出て來るので、恭の德は此處に基くと思ふ。若し敎育勅語にあるとするならば、恭儉の

「恭」の字かと思ふのでありますが、若し教育勅語に明かにお示しになつて居らんければ、軍人の勅諭なり、御製なりに示されて居る通りに心得、宗教的氣分を捨てては人の誠心の開かれないことを知り、皇祖皇祖を奉ずるそこに宗教的の尊敬を失ふてはならぬと思ふ。明治神宮を造營して明日（大正九年十一月一日）から先帝の英靈が鎮座なさるのも、これは宗教的である。それを國民道德ぢやと言つて、今の教育者が言ふやうな、帽子を取つてこの邊まで頭を下げるといふのでは、話が折合はぬぢやないか。さういふごま化しては何時までも濟むまい、懺悔には如何なる罪も滅すると佛教には說いてあるのであります。

それ故に教育勅語には唯今申やうな宇宙的道德、國家の天職、理想が明かになり、國民的道德、家庭的道德、社會的道德、人道的道德、人格的道德の全部に亘りて、明かにお示しになつて居り、「宏遠、深厚」といふ事を適當に發揮すれば、宇宙的の道德もこの中に存し、「恭儉己れを持し」の意味若くはその他の御製、勅諭等に對照して考へたとき、人格の基本も明かである。この宇宙的の道德と人格の基本たる道德とを明かにすると、むやみに宗教を嫌ふことは出來なくなるであらう。それで耶蘇教が妨碍になるならば、耶蘇教は我が歷史的の文化と融和せぬ點があるから、其點を能く注意せよと、正直に教へたら宜からうと思ふ。宗教が必要だと云へば直ぐ耶蘇教が頭を擡げると思ふのは、餘りに教育家が恐怖心に襲はれて居るので、我輩は今後我國に於て耶蘇教が大いに勃興する事はなからうと考へる。一時は耶蘇教に心醉した人もあつたらうが、それは西洋が文明國だと思ふことに依つて、耶蘇教を信じたのであらうが、今日は西洋の文明も大體底を突いたのであるから、決して耶蘇教は左程に恐るべきものではない、今までは耶蘇教は相當な傳播力を有つて居つたらうけれども、今後の日本に於ては決して恐るゝに足らぬと思ふ。若し教育の方面に於て宗教心を拒斥する態度を改めなかつたならば、人心の墮落、思想の惡化といふ二つの爲に、耶蘇教が我が國家を害するよりは、ヨリ多き弊害を生ずるに至るであらう。恰度猫に魚を食はれてはと思つて番をして居る間に、金庫に盜人が入るやうな事になつては、それは餘り賢明な態度ではあるまい。

この點に於てこの勅語の德目とその分類を明にして參つて、さうして實際勅語に意義の包まれたるものは之を擴充し、無いものは無いとしてこれは他の方面から、教育勅語を間接直接に援助する、我が傳統的の文明は、皆採つて以て之を善用すれば宜いと思ふ。勅語に無い事は一切用ひないといふやうなことはいかぬ、勅語と逆行するものは無論いかぬけれども、勅語の御趣旨を翼贊し、勅語の御趣旨を普及徹底する力のあるものは、凡ての文化を應用してこの勅語の効果を擧ぐべく圖つて行くが宜いと考へるのであります。

四、思想選擇の基準と教育勅語

そこで進んで第三段には思想選擇の基準と教育勅語の關係に就て申述べて見たいと思ふ。

今日の我が思想界は紛々擾々實に適從する所を知らぬ次第でありますが、これを此の儘にして置いては必ずや國家社會に大害を釀すことは明瞭な次第であります、人心に安定を與へ、歸嚮を示すことが何よりも大切である。民心に安定指導を與へなければ、百般の施設は民心の腐敗よりして土崩瓦壞に歸するであらう、而して思想の惡化若くは惡思潮の傳播といふことは非常な急激なるものであつて、「霜を履んで堅氷至る」といふが、あゝ霜が降りかけたナと思ふと直ぐ翌日は氷が張るといふやうな譯で、火の燎原をやくが如しとも申して、少し燃えかけたナ

と思ふと忽ち風を受けて三町五町飛ぶが如く燃えて行く樣に、この思想の惡化は急激なるものであります。「我國には歴史的に發達養成したる國民精神があるから、左樣な事はない」と樂觀する人もありますけれども、今日は既に國民精神が頽廢をし、人心が墮落腐敗して居るのでありまして、既に今日に至るまでに思想の惡化すべき素地が十分出來て居るのであります。それは人心を繫ぐべき宗教は日に月に頽廢し、倫理の根柢は破壞せられ、精神生活の價値を認めざる者が、滔々として天下に滿ちて居るのであります。これに惡思想を煽るのは枯草に火を放つが如きものである。惡化すべき原因は充ち滿ちて居る、人心は唯物的であり、利己的であり、目前的である、さうして輕佻であつて、そこに低劣なる文學は横行し、諸種の人心を眩惑すべき事柄が充ち滿ちて居る所に、危險思想は樣々なる形に依つて入りつゝあるのであります。さうして健全なる側のこれに對する態度を見ますれば、研究調査に言葉を託して、この惡潮流を轉回すべき運動は頗る微弱であります。東京に於て御覽になつても分る、この惡思想の傳播を防止し擊退すべき運動として何がありますか、これを雜誌に見ましても、新聞に見ましても、或は言論集會に見ましても、その他の事に見ましても、惡い方の雜誌は盛んに發刊されて居りますけれども、善良なる雜誌が之れが爲に奥つたといふものも極めて無勢力であります。請演會でもやはりその通りであります、矯激なる性質を帶びた會合は數千數萬の人を以て滿たされる狀況であります。過般社會主義同盟發會式を大阪に擧げました時の狀況を御覽なさい、中央公會堂に充ち滿ちて溢るゝ如き人である、而も入場料は一人三拾錢を徵したのである。健全なる思想運動に傍聽料三拾錢も徵つたら一人も來はしませぬ、以て人心の嚮ふ所が分るではありませぬか。これを漫りに樂觀するは甚だ恐るべき事であります、今日は研究とか調査とかに言葉を託して通るべき時ではありませぬ、健全なる思想に居る者は直ちに起つて活動に移らなければならぬ。所が之を學界に見ましても、不健全なる思想を宣傳する者は多々ありますけれども、健全なる思想の爲に鋒に口に奮鬪して居る人は、殆ど見當らぬかの如き有樣であります。民心はその間に次第々々に動搖し且つ惡化して參るのである。それ故に私はこの際は複雜なる議論を闘はして居る時でなくして、彼等の思想の惡化を防止し擊退すべき有效なる方法を執らなければならないと思ふ。

それはこの思想の選擇律を國民の間に提供したらば宜いと考へる。無論一人一個の考を以て之を定め得るものではありませぬが、相當なる人々の間に簡單明瞭に了解すべき所の思想律を選んで、思想の基準を示したら宜からうと思ふ。恰度米を量るには桝のあるが如く、桝なしにして置いて、賣る方と買ふ方との公平を保たさうとしても容易な事でない、併し桝に據れば直ちに決定されるが如くに、度量衡に依つて物の長短輕重多少をはかるが如くに、思想を測定する基準律を與へなければならぬと思ふ。今日の惡い思想はこの基準を一つも認めないで、唯だ勝手我儘な議論を恣にしやうとする、健全なる國民は思想撰擇の基準を握つて、さうしてその謬れるものをドシ〳〵擊退して行つたならば宜からうと考へるのであります。

それではどういふ事が思想撰擇の基準となるかといふに、私は試に十ほどのものを玆に數へて見たのであります。これは十分に熟慮されて居りませぬから、これを取捨訂正するに於て何等異議はありませぬが、併し斯樣なものがあつたならば、餘程思想を捌いて行く上に都合が宜からうと考へるのであります。さうして私はそれと教育勅語の解釋應用とを併せて考へて見たいのであります。即ち私が唯

今申す所の思想撰擇律が正しいものとして、若しもそれに觸れた解釋應用をして居つたならば、やはりそれは一つの失敗を來しはしないか、思想選擇律の標準と一致したる態度に依つて教育勅語を解釋し應用して行つたならば、非常に效果が多くなりはしないかと考へたのであります。是は唯今申す通り熟慮されて居らぬ事でありますが、斯樣な事に依つて思想を取裁いて行くことが必要であらうといふ、一つの型に就いて申すのでありますから、その點は豫めお斷り申して置きます。

(1) 綜合觀察律

第一には綜合觀察律といふが必要と思ふ、今日の思想界の弊は一局部を見て立論する者が多いことである、人類の進み行く文明をば局部より判斷するは頗る危險なことであらう、今一例を申さば所謂物質的の方面に偏傾して、精神生活を忘れて立論すること、法制經濟に重きを置き、法制經濟の着眼からのみ凡ての問題を解釋せんとするが如きことは、全く思想を混亂に導く所以である。今日は思想問題、勞働問題に就て立論する人は多く法學博士である、法制經濟の立場から論を立てる人である。法律と雖もその根柢には道德と離れることは出來ない、經濟も亦道德と離れることは出來ないけれども、併し法制經濟の立場から見たる議論は必ず偏する所がある、法律の方は權利を本とし、經濟の方は利益を本とする、權利、利益といふ事から一切を判斷せんとして居るのであつて、それ以上に高き精神の生活があり、そこに道德があり、宗教があり、哲學があることを無視する、而して法制經濟も是等のものに連繫を取り、是等のものと助け合はなければならぬことを忘れる。左樣にして法制經濟の上に利益、權利の側のみ論じて行く故に、間違つた結論を導き來るのであります。

この事に就て教育勅語を考へたならば、假令大學の教授と雖も教育勅語を遵奉しなければならぬのであり、國民は一般に挙々服膺しなければならぬのである。教育勅語の大體が道德的、精神的の教化方針でありまして、綜合律に依つてお說きになつて居ると思ふ。それは「智能を啓發し德器を成就し」といふ事があり、或は「學を修め業を習ひ」「公益を廣め世務を開き」といふがありまして、何れも皆道德的に示されて居る、「業を習ふ」といふ事も唯だ利益を目的とするのでなくして、道德的に業務を習はなければならぬとお示しになつて居り。「世務を開く」といふ事もやはりその通りて、自己の權利利益を目的にして、さうして物質的生活を營むといふやうな意味は、教育勅語を縱橫十文字に見ても決して出て參りませぬ。日本人の文化生活を經濟學者、法律學者に任せて行かうといふ意味は、教育勅語の中からは斷じて出て來ませぬ、高い精神の文化を本にして國民は教化すべきであるとの大本が、勅語に於て示されて居るのであります。

それ故に教育勅語に就ては、前に申したやうな宇宙的の事なり、或は人格的の事、人の本性にまで入つて行くやうな、倫理上の考察として必要なるものを綜合的に教育勅語の上に觀察しなければならぬ、國民道德を特殊的のものに限つて、さうして單に忠孝倫理のみを說くのでは、私は勅語の精神を明かにし得ないのであらうと考へます、勅語は凡ゆる德目を綜合的にお示しになつて居り、又教育勅語を解釋するに就ては、他の詔勅、御製その他日本の健全なる文化を綜合して考へなければならぬのであつて、教育勅語だけを切離して狹義に勅語を運用するが如きことは、それは綜合觀察といふ思想律に反した態度であります。今日學者が各自專門に分れた爲に、思想が頗る分裂をして參つたのである、それ故に如何なる職務に從事する者でも、この綜合的觀念

を養はなければならぬ。宗教家は唯だ宗教の局部に頭を突込んで所謂國家あるを知らず、文明あるを知らない、唯だ般若心經をボク〳〵とやつて居る、教育者は黒板の前に立つて、唯だ言葉で形式的な事を言つて居つてはいかぬ、實生活に移つて、實際の人生なり社會なりに於ては、宗教の必要缺くべからざる事は、最も能く理解して掛らなければならぬ。自身が宗教を信じなかつたならば、自身の人格が調はない、人格は人格を以て教化すべきものであるから、信仰なき教育家が國民に信念を與へんとするが如きは、實に木に緣つて魚を求むるよりも難いことではなからうか。あらゆる事柄がすべて偏らないで、官僚的といふか、因襲的といふやうな弊害を棄てゝ、所謂「舊來の陋習を破つて天地の公道に基く」との聖旨に依つて、教育勅語を解釋し應用せられんことを希望するのであります。そこに今日は陋習がありはせぬかと思ふ、その勅語に伴ふ所の陋習を打破しなければならぬと思ふのであります。

(2) 本末輕重律

第二には本末輕重律であります、これは道德を研究する上に於ては最も大切なことであり、又人生を研究する上にも大切なことである。物質生活は無論人間に缺くことは出來ない、身體がある以上は衣食住を要する、けれども德は本なり、財は末なり、本末を知れば道に邇しと孔子の言ふた事は、今も尙ほ渝らぬのである。而して教育勅語の如きは、物質本位の教化を施すといふ意味は少しもありませぬ、すべて道德的であり精神主義の聖旨であります。又吾々祖先の遺風は決して物質本位の文明に馳せたものではなくして、祖先以來大和魂といふは決して物質本位ではない、高潔なる道德を以て日本人の本領として居るのである。所謂君には忠、親には孝、夫婦の仲にも敬愛あり、又社會の間には義俠を重んじて來たのである、故に舊來の劇は頗る道德的のものである。今日の新派劇であるとか、新しき文學のやうに淫靡的なるものではない、唯物的なるものではない、非常な高潔なる精神的のものである、それが祖先の遺風である。それ故に本末輕重を明かにするには、この祖先の遺風を益〻發揮しなければならぬ、今日のやうに法律學者、經濟學者が利益權利を力說し、文學者が物質生活に流れ行くのとは違ふ、今日に於て精神的の道德の方面、宗教の方面、理想の方面に働く者を尊まないといふは、即ち國民の思想が本末顚倒して來て居るのである、又それ等の人も考へなければならぬ、自分の立場が法律であるとか經濟であるならば、吾々の事は如何に言うても是は末のことであるから、更に高き宗教道德の先生の話を聽かんならぬといふ位の事は附言しなければ、人に物を教へることは出來ない。

又教育勅語の內容に入つても、是が本末を明かにしなければならぬ、即ち種々ある德目の中に忠孝といふことは日本道德の最も大切なる點であつて、さうして忠は更に大事なことであるから、義勇奉公、皇運扶翼といふ事が最も大事なことである。形式は忠で現れるのだけれども、その皇運を扶翼する所以を忘れてはならぬ、皇運を扶翼する所以は、即ち祖宗建國の大精神を實現するのである。皇運といつても唯だ皇室の御運が盛んといふことではない、皇室は祖宗の皇謨を奉じてこの建國の大精神を進め給ふが爲に、時に陛下が戰場に出でて砲彈の爲に斃れ給ふこともあつて宜いのである、唯だ皇運々々といふ事を形式にのみ解釋してはいくまい。即ち神功皇后の如きは女帝であらせられても、自から軍を帥ゐて戰場に御出征になつた、不幸敵軍の爲に萬一お斃れになつても、それは即ち皇室の天職を盡し給ふ所以である、モウ少し徹底した意味に物を考へなければいくまい。故に皇運といふ中には建國の大精神——

往いては天下を光宅する大精神があることを理解されなければ、本末が明かにならぬ。又吾々國民が大和魂を發揮するとか、國民精神を發揮するといつても、その人の精神の奥に明徳を認め、明徳を磨くには天道を認めるといふ事がなければ、倫理の本末は立たぬ、この事は初めに論じた如く、儒教、佛教、神ながらの教、みな一貫して居る所であります。學校教育に於ては、天道明徳といふ事が力強く教へられて居るが、隨つてそれと直接關係のある宗教の信仰――殊に佛教の信仰の如きは最も適切にこの天道明徳の教を一層明かにして居るものである。それは天道といふ言葉だけ言つても今日の思想では足らないのである、天道とは何ぞと搾しこんで見ると、宇宙には生命を認めなければならぬ、生命を人格として認めなければならぬ……段々やつて行くときには佛教の解釋の方が整備して居る。それが無ければやはり天道といつても抽象的の事になつて、「あゝ穏として已まず」といふやうな事だけでは信仰は出來ないことになる。今は哲學の思想が展びて居る。それ故に「天道までは行くけれども佛教へ入るのは嫌だ」といふやうな頭腦は、今後の思想界を導くことは出來ぬ。佛教は我が日本の文化の中心を成して來たのである。

それ故に本末輕重を明かにしなければならぬ、是は唯だ教育勅語の問題ばかりではない、西洋からデモクラシーの説が來てもその通りである。それはデモクラシーといふ事にも良い所がある、あるけれども併し是は大體壓迫でもされた時分に起る道徳である。自由といふ事もやはり壓迫に對して起る言葉である。家庭に於て親が親切にして汗水流して稼いだ錢を以て子供を養ひ、自分の食ふ物は節約して子供の爲に盡して居るといふ時に、子供が「俺に自由を與へよ」と言つた所が何も意味を成さぬぢやないか、「有難いことであります」と言つて感謝してこそ初めて意味があるけれども、非常に親切にして呉れて、自分は食ふ物も食はずに子供には團子を買つて來て呉れるのに、團子を食ひながら「俺に自由を與へよ」と言つても、そんな事が何になる？　自由といふやうな事は多少の壓迫を前提として意義を有つのである。東洋の道徳のやうに、君は君として仁愛の心を有ち、親は親として慈愛の心を有ち、さうして子も臣も皆精神的敬意を拂ひ、感謝を捧げて居る所に、自由といふやうな事を持つて來た所が、少なくとも是は第二、第三に位する道徳であるといふやうに、その本末輕重を知らなければならぬ。然るに此を捨てゝ彼に趨らんとするは、即ち末を執つて本を棄てるので、やはり暗愚の失を免れぬ。

（續く）

本經祖書要文講義

本多日生

三、持法華問答鈔　受け難き人身を受け値ひ難き佛法に値ひて、爭か虚くて候べきぞ、同く信を取るならば、又大小權實のある中に、諸佛出世の本意衆生成佛の直道の一乘をこそ信ずべけれ、持つ處の御經の諸經に勝れてまし

ませば、能く持つ人も亦た諸人にまされり、爰を以て經に曰く『能く此の經を持つ者は一切衆生の中に於て亦たこれ第一なり』と說き給へり、大聖の金言疑ひなし、然るに人此の理りを知らず見ずして、名聞をもとめ狐疑偏執を致すは墮獄の基ひなり、唯願くは經を持ち名を十方の佛陀の願海に流し、譽を三世の菩薩の慈天に施すべし。

それから『持法華問答鈔』は人生觀の方であつて、人間には容易に生れることは出來ない、佛敎の三世因果の法則から見れば、惡道に墮ちて居る時間の方がどうしても長い譯である、餘程果報が善くなければ人間まで浮び上つて來られない、然るに今の吾々は幸に人間となつて出て來て居る。又人間に生れても、敎も無く法も無いといふやうな世の中に生れたならば、やはり知らず識らず惡を爲して行く譯である、臺灣の土人に生れたとか、或は西伯利亞見たやうな處であつたならば、どうしても自ら惡を爲さうと思はんでも、知らず識らず罪惡を犯すのである。然るに洵に有難い事には佛法の弘まつて居る所に生れ合せて、この上もない結構な果報を得て居る。斯ういふ幸運の者がボンヤリ一生を送るといふ事はない、必ずや立派な思想を打立てなければならぬが、その場合に信念を決るとして、どういふ風にするかと言へば、何でも宜いといふ譯にはいかぬ、信仰は敎に依つて價値が定るものである。「信は女の如し」と言つて、夫の資格に依つて女の價値が定る、少尉の所に嫁に行けば少尉の奧さん、大將の所に嫁に行けば大將の奧さんといふことになる、そのやうに歸依する敎の如何に由つて信仰の價値は定つて來るのである。だから佛敎に由つて信心するならば、大乘、小乘、權敎、實敎といふ區別がある中に、諸佛出世の本意、衆生成佛の直道——佛も大切になさり、一切の者がこれに依つて助けられる所の直道、（直道といふことは廻り道をしないで、一直線に完全な目的に達し得られるといふ事である）その佛の一乘の敎を信じなければならぬ。一乘といふ事は世間と佛法とを融合した敎である、淨土宗見たやうに悲觀的のものではない、又禪宗などのやうに、超世間的でない。眞の一乘の敎は日蓮がやつたやうに、實際の國家なり社會なり人生生活と融合して、「法華を識る者は世法を得べきか」といふやうな所が能く消化れて居るのが一乘の敎である。所が今の文明は世間の方から宗敎を捨てゝ居る、昔淨土宗や禪宗が旺んな時には、宗敎の方から世間を捨てた、西洋でも中世紀は宗敎から世間を捨てた、近代は世間から宗敎を捨てた、それはどつちもいけない、そんな弊害の起らぬやうにするが一乘の敎である。世間の方が盛んになつて宗敎を侮蔑するともいかぬ、又宗敎が旺んになつて世間を忘れてしまふやうな事もいけない、世法佛法が相資けて、現在の生活と理想の生活とを合一して、精神生活と物質生活とを完備して行くのが一乘の敎である、この敎旨を信じなければならぬ。

左樣にして持つ所のお經が結構であれば、その人も自ら勝れたことになる。前に言ふ通り女が良い人の所に嫁に行けば自ら尊い奧樣になるも同じ事である。故に敎は撰ばなければならぬ、宗敎が必要だからと言つても、何でも取込むといふことはいけ

ない、そんな間違は論ぜずして明かなことである。藥が入用だからと言つて藥局に飛込んで、何でも服んで宜いといふ譯にはいかぬ、ちやんと適合したる完全な教を理想して行かなければならぬ。之に就ての日本人の考は實に粗雜であつて、宗教が要らぬと言へば、どんな完全な宗教でも捨てゝしまふ、要ると言へばどんな低劣な宗教でも迎へて來るといふは、恰度食物は要らぬと言つて、干ぼしにして見たり、要ると言へば何でも構はず毒をも食はして見たりするやうな話で、そんな事は實に問題にならん粗雜な考である。

佛教と言へば最初日本に佛教が來た時でも、聖德太子が先づ小乘の教は日本に適せぬ、大乘の教に限る、併し大乘の教と言つても種々の教があるから、これをその儘やれば幾つにても宗派が分れる、だから法華經を中心にして統轄したる意味に於て佛法を用ゐよ、さうして日本の佛教の中には小さな宗派の分裂をしないやうにといふことを聖德太子が注意されて居る。この注意を忘れぬやうにすれば宜いのだけれども、下らない宗派が分裂して居るのを、どれもこれもその儘宜しいといふやうな事を言つて、佛教が健全な感化の力を失ふやうにして仕舞つたのである。今の宗派ナンといふものは大したものではない、元々僅かの見解の相違から出來て居るので、今日は佛教を理想的に復活せんければならぬ、愚なる過去の執着は一切切り捨てゝ、理想的なる、完全なる、意味に於て佛教の復活を圖つて行かんければならぬ、それを日蓮聖人は主張したのである、或る意味に於て日蓮聖人は誤れる信仰を覺醒する運動をなさつたので、一方から言へば熱烈なる信仰鼓吹者であるけれども、一方から言へば或る囚はれたる信仰を折伏したる人である。今の日本もやはりこの筆法で行かなければならぬ、何でも宜しいといふ事は教化の大事を誤まる思想である。

それであるからお經の中にも、法華經を持つ者が最も勝れて居ると說かれて居る。これは宗教を信ずるにはその教を撰ばなければならぬ、道德でもやはり教の主義を考へなければならぬ、その人が幾らえらくても、共產主義を振廻すやうであつたならば、その人が如何なる偉大な人物でも、その主義から見て甚だ不都合な人になつてしまふ、人格ばかりを見て主義を見ないのは、愚なる觀察である。今日はいろ〳〵惡い思想が出て來たから、始めてそれが分つて來るだらう、博士であるとか大學の教授であるとか言つても、それは學者で、さうして中々親孝行だとか、親切だとか、借金しないとか、そんな事を言つて見た所が、その人の思想が共產主義を奉じて居つた時には駄目ぢやないか。そこを日蓮が言ふのである。その人個人としては智慧があり、德があつても、その主義を吟味して行かない限りに於ては、宗教が却つて世を毒することになる。大聖の金言は疑ひない、必ずや佛教をやれば、法華經を中心にした信仰でなければならぬ。これも何も佛教の中で他のお經との闘ひを勸めるのではない、佛教は法華經に於て統一されて居る、佛教には七千餘卷の經卷があつても、纒めれば華嚴、阿含、寶積、般若、法華、涅槃、これが佛教の全體である。この中から法華經を除いてしまつたら、華嚴、阿含、寶積、般若、涅槃だけでは佛教の生命が無くなつて仕舞ふ。法華經がなくとも佛法の捌きがつくと思つて居るのは佛教

をやらぬからである、一切經に就て研究せられたならば、その事は頗る明白なことで、諸君等は大體その意味を諒解せられて居ると思ふ。けれども世俗はそれを知らぬ。阿彌陀經が宜いとか、大日經が宜いとか言つて居るが、そんなお經は一つや二つ無くても佛教の興廢に何の影響をも持たぬ、けれども法華經を除いてしまへば、佛教は屋の要が無くなつたやうな譯で、バラ〳〵になつて、何が何やら纏りのないものになつてしまふ。然るに今まで大きな寺に居つたとか云ふやうな名聞の爲に、法華經中心の佛教に歸順することが出來ないで、狐疑偏執を致して、「さう言つても今の宗派にも善い所があるだらう」とか、或は今迄の偏見を墨守して、この偉大なる思想の覺醒運動に來らない。日蓮聖人の當時で言へば、國家の方では皇室を中心にして北條の惡逆を叱正し、その不義不正を反省せしめなければならぬ、佛教の方では法華經を中心にして、區々たる宗派の分裂を否定しなければならぬ、即ち封建藩閥の政治は日本の國體の爲にも國家の進運の爲にも有害なりといふ事は、今も昔も變らぬ眞理である。佛教がやはりその通りて、楞伽經や阿含經が威張つたならば、恰度陪臣權を弄するやうなものである、北條が伊豆の土民から出て源家を倒し、天皇を流すが如きものであつて、低い所のお經を推尊して、偉大なるお經を蔑ろにし、小宗派を分離せしむることは、各藩が割據して居るやうなものである。それてあるからこれはどうしても廢藩置縣、政令一途とならなければならぬ。佛教が偉大なる活動をしやうと思ふならば、今の小さな宗派の分立を否定して、さうして法華經中心の統一的佛教としなければならぬ。この事は天台、傳教、聖德みな然りである、佛教に精通した人は、皆法華經を中心にせられて居る、それは楠正成であらうが、菅原道眞であらうが、水戸光圀であらうが、豐臣秀吉であらうが、加藤清正であらうが、皆えらい人はさうやつて居る、朝廷は無論法華經中心である。唯だ鎌倉とか又德川のやうに、我が國體を晦まして封建政治を維持しやうとする者は、大義名分を明かにする所の日蓮主義とか法華經思想が邪魔になる、さういふ者が法華經を嫌つたからと言つて、それを眞似する必要はない。今日は既に明治維新以來王政復古して、政令一途の日本である、佛教も最初聖德太子が定められ、桓武天皇が定められた時のやうに斷然統一主義の佛教の復活を叫ぶべきて、厭世的な超世間的なものはいかぬ。社會の先覺者を以て任ずる者は、この位の識見を決めて行かなければ駄目である。今も明治維新の最初にボンヤリして居つた、宗教に關する觀念の完らなかつたやうな事を何時迄も繰返して居つてはいかぬ、それから以來は五十何年も經つて居るのであるから、少しは宗教に對しても觀念を進歩せしめなければならぬ、何時迄も愚なる觀念で居つてはいかぬ、左樣な狐疑偏執を有つて居れば遂に地獄にも行かなければならぬ、唯だ願くは法華經を持ち、さうして名譽を佛樣の世界、菩薩樣の世界に導かすやうに考へて行くが宜い、世人を對手にすれば譯の分らぬものが澤山あるから、日蓮主義者はそんな俗見者流に依つて可否を問ふのではない。明治維新の當時の佛教に對する態度でも、又今日佛教を觀て居る者でも、目鼻のついて居る者は殆ど無い、日本で宗教の復活を叫ぶならば無論佛教である、その佛教ならば纏りの

ある法華經の思想に來るべきて、この考察の立たぬやうな者は我國の宗教を語る資格は無い者である。

四、守護國家論　偶ま十方微塵の三惡の身を脱れて希に閻浮日本爪上の生を受け、亦た閻浮日域爪上の生を捨てゝ十方微塵の三惡の身を受けんこと疑ひなきものなり、然るに生を捨て惡趣に墮つる緣一にあらず、或は妻子眷屬の哀憐に依り、或は殺生惡逆の重業に依り、或は國主となつて民衆の嘆きを知らざるに依り、或は法の邪正を知らざるに依り、或は惡師を信ずるに依る、此の中に於て世間の善惡は眼前に在れば愚人も之を辨ふべし、佛法の邪正師の善惡に於ては證果の上人すら尚ほ之を知らず、況や末代の凡夫に於てをや、加之佛日西山に隱れ餘光東域を照らしてより已來、四依の慧燈は日に滅じ、三藏の法流は月に濁る、實經に迷へる論師は眞理の月に雲を副へ、權經に執する譯者は實教の珠を碎きて權經の石となす、何に況や震旦の人師の宗義其の誤り無らんや、何に況や日本邊土の末學誤は多く實は少なきものか、隨つて其の教を學ぶ人數は龍鱗よりも多けれども、得道の者は麟角よりも希なり、或は權教に依るが故に、或は時機不相應の教に依るが故に、或は凡聖の教を辨へざるが故に、或は權實二教を辨へざるが故に、或は權教を實教と謂ふに依るが故に、或は位の高下を知らざる故なり、凡夫の習ひ佛法に就て生死の業を增すこと、其の緣一にあらず。

尙ほ發心の事に就て『守護國家論』が引いてありますが、これも大體は同じ人生觀から來て居るので、いろ〳〵考へて見ると、この生れ代り死に代りする中に、人間に出て來るといふ事は容易でない、殊に日本の國に生れたといふことは、寔に有難い事ナンである、多くは地獄に住んで居る身が、今や日本に生れて來たのであるから、虛しく一生を送つてはならぬ、立派な志を立てゝ意義ある人生を開拓せんければならぬ、併ながら中々妨碍の多い世の中で、或は妻子眷屬の事から、それに心を引かれて正しき精神を貫くことが出來ないとか、或は殺生惡逆の重業を作つて、その罪の爲に地獄に墮ちるとか、又國主として民衆の嘆きを顧みないで、權力を濫用し或は又法の邪正、即ち道德とか、宗教の善惡を知らずして、間違つたことをやり、或は惡師を信ずると言つて、詰らぬ人を信じて、今日でも隨分相當の身分の者でも下らぬ者を信じて居る人がある、何とかいふ大將などが佛教の惡口を言つて、さうして何か新興者の出來損い見たやうな者に「大先生々々〳〵」と言

つて頭を下げて居るとかいふが、實に成つて居らぬ、そんな者は恥を天下に曝して居る者である。日本人が佛教に依り法華經の信仰に依るといふことは根據もあることであるし、歴史から言つても當然な事である。日本は聖德太子以來法華經を尊崇したる國家であつて、政治家としても、法華經の研究をせずして、廟堂に立つことは出來なかつた。それを日蓮聖人は穢多だナンど言つて「ア、さうか、そんな者はいかぬ」といふやうに、一顧もせずしてこれを捨てゝ、下らぬ新興者に迷つて行く、誠に憫れな者である、それが惡師を信ずるといふ事である。さういふやうな事の爲に地獄に墮ちる。その中に於て世間の善惡は今日蓮が言はなくとも眼前にあるから誰も分ることである、けれども佛法の中に入つての善惡は、覺つた人でも分らぬ位のことである、何故分らぬかといふと、教の方から調べて行かぬから、ナンボ活如來のやうに見えても、佛教の教義の關係を知らない者は分らぬ、佛教を大觀するには法華經に限る。他の宗旨の者は、依經が粗末であるから、比較研究などをやると經綾が出るから比較研究をしない、楞伽經なら楞伽經一點張、阿彌陀經なら阿彌陀經一點張である、法華宗だけは法華經が一切經中第一の教であるから、如何なるお經でも皆比較研究をして、佛教全體の總論よりして教義を打立てる。他は別論から唯だ部分に頭を突込んで行くのであるから、そんな者は今後の佛教復活運動には役立たぬものである。故に立派な證果を開いて居るやうに見えて居る人でも分らぬのぢや、況んや一般の凡小輩は到底分るものではない。殊に佛が御入滅になつてから大分年月も經つて居るし、天竺から段々東の方に法が傳つて來た間に、立派な人も出られたけれども、茲にある「四依」といふのは佛弟子の階級であつて、四通りの區別がある、その四依の法燈は段々減じて來るし、三藏の法流と言つて一切經に通じたやうな人の流れが段々濁つて來る。さうして月が曇つて來るやうな風に、法華經の何たるを知らず、眞理の月に雲を副へるやうな譯て、法華經を學ばない人達がいろ〳〵な事をいふ、或は方便の教に執着して居る者が飜譯者となつて、御經を飜譯する時分に宜い加減な事を御經の中に混へる、それは眞言の飜譯などでもそんな事があつたのである。さう云ふ譯であるから御經文でさへも間違ひが入つて來るやうなことになつて居る。況してや支那を經て日本へ來た、日本の末學等の誤りは、實に誤りの方が多くなつた譯である。それ故に佛教を學ぶ者は澤山あつても、その教に依つて覺る者は無い、學ぶ者は龍の鱗ほどあつても、覺る者は麒麟の角だけも無い譯である。それは總て權教、實教の關係を間違へることに依つて起るのである、いろ〳〵この御文章に書かれてあるけども、要するに權教、實教の區別が分らぬ。法華經は一切經の中の眞實の中の眞實である、他の御經は方便の教である、この事は凜乎として動かぬ、誤魔化しのやうな學者が出たり何かして、宜い加減な事を言つて、今てもいろ〳〵な事をいふ者があるが、それは無責任な者で、さういふ者の言ふ事は顧る價値の無いものである。德川時代などの儒者に於ては無論佛教に精通した人も居らぬし、現に生存して居る人でも、佛法の事に掛けて別段佛教の優劣などの意見を聞く價値ある人はありはせぬ。法華經を中心として研究しない樣な學者は、佛教に就て目鼻が開

かぬと斷言して差支へない、その事を日蓮聖人は茲に言ふのである。

斯の如く佛教を習ふに就けて生死の業を增すと言つて、何か言うて見なければなるまいといふ樣な事を考へて、色々の事を言ふ、この頃も或る學者が日蓮聖人の事を何とか變つた方から言うて見やうと思つて、安國論に關して色々の事を言つて居るけれども、要するに言はぬがまし位の事ぢや、從來は佛教の事にも精しい人はなかつたから、何でも言ふたらそれが宜いと思つたけれども、實は何も知らずに言ひ居る、それは即ち世人を惑はす者である。日蓮聖人が大獅子吼をして警められたことは、今も尙ほ眞理であります、私は確かにその事を信ずる。今日は誤魔化しの事ばかり多い、何人でも法華經の中に入つて法華經中心の思想から佛教を見なければ、完全な佛教は決して現れて來ないのであります。

要するにそこに發心をして、宗教の必要と、及び宗教を撰擇する事、その撰擇の中には法華經中心の思想に來ない限りにはいけないといふ事が、發心の當時に含まれて居らなければならぬのであります。

（二）宗　旨

第二篇『宗旨』に就て講述致します、宗旨といふは、『宗』は主なり要なりと言つて、幾多の教義中に於てその主要なるものを指すのであります。「旨」は旨致、旨歸、旨趣などと申して、教義の歸結をいふのであります。即ち今日多く用ひられて居る言葉に譯しますれば、教義上の要領論結を指して宗旨と申すのであります。尙ほ「宗」の字の意味は、深き教に達するにはそれに至るべき要路を辿つてゞなければならぬのて實行上に於てその成功を示す意味になつて居るのてある。絕對の眞理、絕對の妙處は直に達し難きものてある、即ち他の言葉を以て言へば吾等が佛の覺を得ることは直ちには出來難き事てあるが、この教の要路を辿つて歩めばその覺に達することが出來る、故に宗旨とは人々をして佛に至らしむべき主要なる教義を示すことをいふのてあります。それ故に佛教には幾多の教義があり、又深遠なる法體が示されて居るけれども、必ずやその多くの教義の中より撰擇して、要路を押へて、又その深遠なる法體に達すべき要路を求めて、茲に宗旨なるものが起つたのてあります。

而して今日蓮聖人に依つて唱導せられたる宗旨、その名は教に就て言へば顯本法華宗、人に就て言へば日蓮法華宗てあります。それは法華經の教の中に於て要路を押へ、法華經の法體に達すべき要路を押へて日蓮聖人の宗旨が立つて居るのてあります。その宗旨の內容は三大秘法と稱して、本門の本尊と、本門の戒壇と、本門の題目といふ三つに纏められて居りますが、尙ほ之を一大事の秘法に纏める時には本佛に歸依する意識信念を指すので、その唱へ言葉としては南無妙法蓮華經と申して居るのてあります而してその意味合を傳へられたのは日蓮聖人てあります。故に絕對の實在者として本佛を戴き、その信仰表白の唱へ言葉として法華經の題名を唱へ、その心得方を學ぶに就ては日蓮聖人の主張を仰いて居るので、本佛と妙法五字と日蓮聖人とを本門の三寶と稱して、それが本尊の本體となるのてあります。「戒壇」はその本尊に歸依する信仰を誤らないやうに、嚴密にその宗旨を守ることを第一に置いて、誘法と

申してその教に背くのが第一の罪惡となるのであります。丁度我が國民道德に於て、皇室を奉戴し、皇室に忠誠を盡すことが最高の道德とせられ、朝廷に背くを逆賊と稱して第一の罪惡とせられたが如く、三寶に歸依するを以て佛教信仰の正路と言ひ、三寶に違背するのを謗法と言つて第一の罪惡とせられるのである、謗法とは法を謗ると書いてあるけれども、佛に背くことも僧に背くことも、總て謗法と稱するので、詳しくは「誹謗三寶」と言つて、三寶に背くことを謗法と申して居るのであります。

大體はそのやうな次第でありますが、それに修行の方に於て本門の題目と示されたのは、信行に基いてこの本佛を渴仰する所よりして、本佛の與へられたる妙法五字を唱へ奉るのであります。信仰意識の感應主と申して、感應利益を戴く中心は本佛にある、文字にあるのではない。文字中心の思想もありますけれども、それは眞言の阿字の思想を攝取包容したので阿字に代へるに妙法五字を以てせられたのである、その意義は涅槃經より起つて來て居りますが、法華經の壽量品に依つて建てたる日蓮の宗旨としては、文字中心の思想は傍系の教義であります。壽量品は本佛中心の思想で、是好良藥として、留められたる妙法五字は、良醫の擣き篩ひ和合して與へられたものであつて、良醫無き時良藥のありしものではありません。それは釋迦牟尼の教を結晶して、その粹を集めて法華經とし壽量品とし、遂に妙法五字に結んだので、釋尊の說法を結晶したものである、若しも釋尊以上に妙法の文字があつたといふ思想を日蓮教義の最高思想と致せば、本門壽量品の教義は隱れてしまふのであります。又唱題の行と申して題目を唱へることが有難いといふ事は至る所に教へてありますけれども、これは淨土門の稱名念佛の行に對して、それを攝取した思想でありまして、その意義は法華經の一句を受持する者といふ事に基き、又は神力品の四句の要法を受持し讀誦し云々といふ五種の行がある、それに基いて證明はせられて居りますけれども、唱題の行が日蓮の教義の中心思想ではないのであります。それは壽量品に依つて見ますれば題目を唱へることを以て最高の教義とはして居ないので、本佛に對して一心に佛を見たてまつらんと欲する所の渴仰戀慕の心を以て第一に置いてあるのであります。それ故に唱題の行と言ひ或は文字最高といふが如き思想は或は眞言に對し或は淨土門に對して彼等の宗教意識を包容攝取して、彼等の唱へ言葉よりも彼等の文字よりも更に秀でたるものが法華經にあるといふ主張に依つて、佛教信仰の分裂を避けやうとした日蓮聖人の主張であらうと考へます。單純に法華經の壽量品の中心の思想よりして導かれて參ります時は、開目鈔に示されたが如く、本佛に對する意識を以て最高の教義としなければならぬ。

又その他に一念三千の教義と稱するものがあつて妙法とは一念三千の法體である、或は當體蓮華であると稱して、觀念の修行の方に關係して說明が餘程澤山あります。それ故に妙法は宇宙の實相である、萬法即妙法であると申して、殆ど觀念觀法の說明かの如きことが教義の中に多數交つて居ります。さうして從來日蓮宗檀林の學風が、全部天台學に傾きました爲に、中古以來聖人の遺文を解釋するに就ても、殆んど天台風の思想に趨りまして、所謂天台の袋擔ぎと稱する弊害に陷りましたから、妙法を觀

法としての見方、一念三千であるとか諸法實相であるとか、當體蓮華であるとかいふやうな理論的の說明に於て妙法を見ることが多くなつて參りました。妙法は釋尊よりも尊いといふ時には、諸法實相に入つてさうして佛はその以下に位するといふことに、說いたのでありますが、これは歷史的には天台の思想を攝取する爲に、日蓮聖人が摩訶止觀より進んで觀心本尊を說き、立正觀を說き、種々に發展進步致しまして觀念觀法の理智よりも更に偉大なる信仰があるといふことで、この理智を蹴らずしてその理智を啓發して信行に繫がらしめた爲に、一步逆轉しますれば妙法に對する信仰が觀法の如く見えるので、それは觀法に停つて居る者を引き上げて來て、天台の觀念に向ふ思想をば日蓮の信行の中に攝取包容せんとしたのであります。その籠が綏むからして包容したものゝ方に墮ち行くのでありまして、丁度日本の文化が、歐米の思想を攝取包容せんとして籠の綏んだものが外來思想に感染れて行くが如きもので、この風は餘程多く中古以來の學風に現れて居りますが、それは天台の思想である故に左樣な思想を以て日蓮聖人の本懷とするならば、特に日蓮宗を別立するの必要は無いので、全然叡山の殘黨と他の宗旨の人が言つたと同じ事で獨立の意義を有たない、又法華經の方に於て言ふならば、妙法を觀法として見る思想は迹門方便品に現はれ、又修行としては安樂行品に現はれて居るのでありますこと故に、左樣なことならば日蓮聖人が壽量品に依つて宗旨を建て修行の方式を分別、隨喜の二品に依つて定めたといふことが壞れてしまふのであります。飽く迄も信行であります、信行には妙法を實相理智の解釋に止むるが如きは函蓋相合せざるの思想である、信行に就て總るべき者は人格者でなければならぬのであります。この點が鮮明ならざる爲に、中古以來の日蓮教學は頗る混沌の體に陷つて、遂に信仰を失ふに至り、學者と稱せらるゝ者は殆ど信念の妙旨を知らないことに相成りました、若し信念を有するならば、それは俗惡なる迷信に墮落を致しまして、鬼子母神の信仰とか、厄除日蓮の信仰とかいふが如く、低劣極まるものとして唯だ題目を唱へ、千箇寺詣りなどと稱して、團扇太鼓を叩いて乞食の眞似をする者のみが多くなつて參つたのであります。日蓮聖人が立正安國を唱へ、本門戒壇の建設を理想し、一天四海皆歸妙法を誓ひたる高遠なる宗教の信仰修行と致しましては、頗る愚劣なる狀態に墮落を致したのであります。それ故にこれ等の妙法を實相理智の方に引摺つて行く思想は、壽量品の教義を方便品の方に墮すのである、本化日蓮の教學を迹化天台の教學に墮落せしむるものであるといふことを明晰に意識しなければならないのであります。所が左樣な思想は天台に趨らんとする者を引上げて來る爲には、日蓮聖人の遺訓の中に實際に現れて來ること故に、それ等の思想を包容し啓發して行くべき教訓を、啓發といふ事を忘れてそれが日蓮聖人の主張だと一步元に逆轉しますれば、唯今申したやうな弊害が續出するので、天台觀法の思想の爲に壽量品の最高の信行が破られ、本佛に對する信念を失つて、實相妙法といふものが尊いといふ事に相成り、さうしてその妙法の實際が分らぬ、觀法でもないのであるから、摩訶止觀のやうに正確なる理智の修行をやるのでもなければ、どちら附かずである。信行としては本佛を

意識せざるが故に燃えて來ない、觀行としては天台の如くに法華三昧をやるのでもなく唯だ濁聲擧げて本經を讀む位のことでありますから何等理智が開けても來ない、愚鈍なる俗惡なる思想のみあつて、少しも哲學としても發達をしない、愚にも附かぬ俗論をやつて居るのであります。

この三つの弊害を注意致しますれば、そこに始めて日蓮聖人の純粹の宗旨が明かになつて參るのであります。妙法を文字として妙法五字の光明に照されて本有の尊形となるといふ言葉の如き、夫と同じ類の教訓が多々ありますが、それを最高教義とすれば文字が一番尊いことで、本佛はその文字の光の下に生れたといふことになります。又唱題を最高と致しますれば宗教の意識は要らなくなつて、狐の前でも狸の前でも題目を唱へれば事足れりといふやうな低級なる宗教となるのであります。實相理智の方に赴く故に、冷かなる思想になつて、信念を失つて參るのであります。それは少數者の間にその弊害があるのではありませぬ、極論すれば中古以來全部この三つの誤りの何れかに彷徨して居るのであります、今日の日蓮門下の教學と申しましても、恐くはこの三つの混亂を脱却して居る人は少ない譯であります。觀念理智の方に陷つた、そこには日蓮本佛論、己心本佛論などと申して、絶對無上の釋尊を侮蔑して、日蓮聖人を最高として崇めんとし、或る者は又當體蓮華のことに惑うて阿佛房さながら寶塔といふ言葉或は無作三身の寶號といふ言葉を誤解して、禪宗に等しき自分が佛だといふやうな考へて、慢心のみ殘つて居るやうな者が多々あるのであります。今日自己の主張の鮮明なる者は殆んど見當らないので、何が故に獨立を標榜して居るのか、意義を成さないやうな頽廢した狀態に居るものであります。而して誤れる者多きが故に、正しき者を嘲けるやうなことて愚にも附かぬ者が俗論を亂發して居るのでありますが、而し壽量品の經文は儼存して居る、又その義理も洵に鮮明であつて、即ち了義經と稱して、文に依つて義を判じ得るだけに、誤魔化し得ないやうに壽量品は說かれて居る。故に文字に囚はれざる精神を以て壽量品を研鑽するならば、何人にも唯今申した事柄を了解し得るのであります、壽量品に於ては阿字觀的の文字神聖論はない、又唱題を最高の教義としない、實相妙理に陷るやうなことは無論ないので壽量品を研鑽し、續いて分別功德品、隨喜功德品を研鑽して參りますれば、左樣な俗學俗論はその誤りが明白になる次第であります。

左樣なことが「宗旨」に就ては大事な點であらうと思ひますが、他はこれから拔粹してある經文・祖書に基いて申上げやうと思ひます。

大僧正本多日生猊下講演
日蓮聖人降誕七百年
統一臨時增刊聖誕七百年紀念號
大正十年二月十日發行

目次

一、降誕の因緣
　イ、如來の化導を助けんが爲め……ロ、我國の文化を大成せんが爲め
二、教化の中心
　イ、法華經の教義……ロ、我國文化の正統
三、門下の覺醒
　イ、紙字局量……ロ、教義の給乏……ハ、信仰の低劣
四、門下の事業
　イ、信仰覺醒の運動……ロ、思想善導の運動……ハ、相互の聯絡運動……ニ、紀念事業（出版、建築其他）
五、統一團の覺悟　已上

定價、一部金拾錢、郵稅金五厘。百部以上二割引。施本傳導に御使用の方に對しては拾萬部を限り定價半減一部金五錢の割にて頒與す。

教義

日蓮聖人教義綱要「第四十四回」

井村日咸

第十章　本門の題目

第二節　適時と傍正

日蓮聖人曰く

正法を修して佛になる行は時に依るべし、日本國に紙なくば皮をはぐべし、日本國に法華經なくして知れる鬼神一人出來せば身を投ぐべし、日本國に油なくば背をも燃すべし、厚き紙國に充滿せり皮をはいでなにかせん、（縮遺八六三）

と、又曰く

問て云く何なる時か身肉を供養し、何なる時か或を持つべき、答て云く智者と申すは此の如き時を知つて法華經を弘通するが第一の祕事なり、譬へば渴きたる者は水をこそ用ゆる事なれ、弓箭兵杖を用ふる事由なし、羸なる者は衣を求む、水は用ゆる事なし、一を以て萬を察せよ、（縮遺一一六六）

と、此文意を能く翫味して、法華經の修行を誤らぬ樣にせねばならぬ、本篇第八章第一節の下でお喇致した事ではあるが、重大事であるから、今結論に於て再び申上げる、折角佛法に志しても、其骨折が徒勞に歸する樣な事に成つては一大事である、宜しく其時機に適應する樣に心掛けねばならぬ、然し其實行の方法は應用に屬することであるから、具體的にドーユー風にと云ふ譯には行かないが、適宜の應用を誤らぬ樣に其方法を考案し實行して行くものが智者と稱せらるべきである。要は一天四海皆歸妙法の祖願を達するに就て、より善き方法、功果ある手段を考究實行するに外ならぬ、唯傳來の型に囚はれ、傳說的の舊慣を墨存して居る樣では折角信仰しながら、佛に成れない樣になりはせぬであろうか、七里法華の眞中で念佛無間を叫んだりするのは無意義である、岡山縣に御立義と稱する一派があるが、此派ではお佛壇に向つて念佛無間眞言亡國等の四箇格言を叫んで居るが、如何に日蓮聖人の御立義とは言へ佛樣に念佛無間をお敎へ申す必要は無い、履き違へるとコンナものも出來る、日蓮主義の修行の如何なるものであるかを研究せぬからである、今や世界の思潮は混亂に混亂を重ねて、適從する處を知らない、此時に當つて我日蓮主義は所有思想を統合歸一すべきの大理想を有して居るのである、日蓮聖人が立正安國を叫び、知法思國と唱へ、日は東より出て、西を照すと曰ひし、大抱負大理想は、今日に於て眞に其光輝を全宇宙に輝かすべき時機に際會して居るのである、此時に當つて此が實現に努力せずんば果して何の時を期すべき、然るに此時に當つて徒に讀誦を專にし、加持祈禱に熱注して、低級の信仰を陵りて以て得々たる徒輩の存するは慨嘆に堪へざる次第である、日蓮主義勃興の今日に際し翻然其非を改悔し、協心勢力主義の宣傳に從事せざるべからざるにも係らず、正義の假面を被りて自己が野心を滿足せんとするもの隨所に散在するは甚だ遺憾に堪へざる次第である、此等は正しく時を知らざる人々であるから、假令日蓮聖人の末弟と名乘り、法華經の信者と稱するとも、日蓮聖人の所謂

上の如くすれども佛にならぬ時もあり、（遺一一六七）

の、佛に成らぬ連中であらう、自己は如法に行ひ澄して居ると思へども、其時を失へば成佛叶ひ難き事である、眞實に佛に成らんと思はんものは、日蓮主義大宣傳に努力し全力を擧げて此經の廣宣流布に盡すべきである。

今年は日蓮聖人降誕第七百年に際し、各地に於て宣傳講演の盛に開始せられて居ることは非常に喜ぶべき現象として、誠に同慶の至りに堪へないが、扨て一面翻つて、其宣傳の内容に就いて考慮を費すと甚だ心細からざるを得ない、それは何である、今の多數の日蓮門下と稱して居るものが、何を宣傳するか知つて居らるるか、實傳する何物をか持つて居るか甚だ疑はしい、其故は、今の日蓮門下と稱して居る人々が、本門の本尊に就て正しい信解と實際とを持つて居るか何うか、今の人は日蓮聖人を知つて居る樣だけれども、日蓮主義は知らぬ人が多い樣に思ふ、日蓮主義を徹底的に研究して行つたならば本門の本尊に其根源を發して居ることが分らねばならぬ筈である、然るに日蓮主義はやつたが、本尊の事は愚圖々々で一向分からぬとあつては日蓮主義が分つて居らぬ證據である、日蓮主義の信仰は本尊に向つて發する信仰であり、本尊を其依據として顯はれた信行であれば、本尊に對する信仰意識が明確でなければ、其信仰の依據を失ふて仕舞ふ、其依據が無くして信仰のみが存在する譯のものではない、其依據を失ふたが故に迷信と爲り妄信と爲つたのである、日蓮主義は本尊を誤れば、主義の全體が失はれて仕舞ふのである、此事は前來お斷致した事であるから詳しく申上ぐる必要は無いが、今の日蓮主義の運動が本尊改善問題を閑却して居る以上は、如何に其聲大なりとも、主義宣傳の上に何等の功果を及ぼすものでない、我等は斯る低級の日蓮主義の宣傳は却て日蓮聖人の面目を傷けるものとして情無く思ふものである、本節に於て御斷致さうと思ふた適時と傍正と云ふは此點である、時に適ふた主義の宣傳は大切な事であるけれども、傍正を顚倒した場合には此又佛に成り得ぬ次第である、日蓮主義の修行は前節に申た樣に各方面に亘つて扇面狀に擴大せられて行くから、非常に廣い、然しながら、其中に傍正あることを見て行かねばならぬ、即ち體道用道に於て、體道が其根幹であり、用道は其根幹より發した枝葉である事を能く理解して行かねばならぬ、根幹あつて枝葉は繁茂すべきである、根幹たる上本尊に對する信念が確立せられて、世間に對し出世間に對しての大活動と爲つて顯はれて來るのである、日蓮聖人一期の御活動は、正しく上本尊に對する熱烈なる信仰より發し來つたものであることは、其實際に於て、御遺文に於て明白に示されて居る所である、然るに今の日蓮主義者は其根幹たる本尊問題に觸るゝ事を避けて居る、避けて居る計りでない、益々謬亂に陷らんとして居る、斯くしては日蓮主義は存在し得ない、名は日蓮主義と稱するも其實は失ふて居る、斯る日蓮主義の宣傳は空砲發火演習と同樣、唯音計で其實が無い、空燥丈で終るのである、此皆傍正を顚倒したから斯樣な事になつて仕舞ふたのである、

顯本法華宗の開祖日什上人は六十八歳にして、天台宗より日蓮主義に歸伏せられた篤信のお方であるが、其當時の日蓮門下の凡てが、但什弟嫡弟の爭と云ふて、我の方が日蓮聖人の嫡流だ、我の方が正統だと云ふ樣に本家爭に沒頭し、修行に於ては本迹雜亂、受持分絕と云ふて、其傍正を顚倒して其時既に本尊を謬亂するが樣の傾向があつたと見へて、受持分絕へたりと云ふて居らるゝ、受持分とは今身より佛身に至るまで能持ち奉ると本尊に對する自誓戒であるが、夫れが最早失はれて居つた、そこで餘儀なく獨立して一宗を開創せられて、本正迹傍從淺至深の立義を立てゝ、其主張を明かにせられた、本正迹傍とは古來但本迹兩門の一致勝劣と云ふ爭

ひ丈に就いて言ふて居るが、日什上人のは修行に就て、本正迹傍と言はれたので、實行の上から其根本を主とし正意として行かねばならぬ、此信仰の根本を正意とし行けば當然本尊を確立して行かねばならぬ、本尊が確立すれば我等の信仰との間に受持分は成立する、此が正しき日蓮主義であるとの御趣意から獨立せられた、此主張を遵奉し來つたのが、我顯本法華宗である、此故に我顯本法華宗には本尊に就ては嚴重に、誤なき樣に掟られてある、中古一二の間違もあつたが今日は皆革められて居る、我教團は其說く處に於ても其實際に於いても、純正に日蓮主義を宣傳し遵奉して居るものである、或教團の如く其所說と實際と矛盾して居る如きものでも無く、又舊慣を墨守し讀誦專門を事足れりとせず、隨力弘通に從事しつゝあるのは正しく開祖日什上人の賜とせねばならぬ、日蓮主義を信ずる人士は宜しく其傍正を誤らざる樣適時の宣傳に努力せらるゝならば、必ず佛に成り得らるゝ事疑なしと思ふのである。

日蓮主義畸人傳

九、關口春吉君

越前の生れで現住所は名古屋市熱田、年晩勤め先砲兵工廠から歸宅すると、しばらしい大太鼓を打鳴して夕の勤經を始める、音に四隣を折伏せんとするのだ。妻君は流石に女の事故、幾分世間に妥協せんとする傾がある。或る日親戚に葬式があつて、妻が御通夜に出かけた、先方は念佛の家だ。若しや例の妥協的態度から御通夜の際妻がどんな事をしやうかと、連れ添ふ女房の未來世迄を案じた君は、そつと妻の後を追行した。屋外に佇立する事約一時間、晩酌の酒も全く醒めんとする頃室內では讀經が初まつた。樣子如何にと窺ふと、果せる哉二世を契りし女房は一同に交りて無間地獄の彌陀の名號を唱へて居る。己れ徹底するまで誓めてくれんと、ツカ〳〵と屋內に侵入した同君は、やにはに妻の髮をつかんで引ずり倒した、橫顚面には嚴寒の雨が降り注る　念佛の坊主を初め座に在りし一同は此の强折伏に、呑然として聲を發する者もなかつた、そして妻君の双頰には絣の樣な痕が出來たが、然し其の心は和らいだ、爾來夫婦打揃ふての淸き信仰に、關口家では年中春風駘蕩として、其の平和な家庭は近隣羨望の的となつて居る、近く同君は北海道に移つて北日本の果に日蓮主義の結會を建立する志ありとの事だ。

史料

宗門史料

青村編

山城國愛宕郡川東　本涌山　妙泉寺
若狹國遠敷郡小濱　常在山　本行寺
越中國富山寺町　壽福山　正顯寺
尾張國丹波郡瀨部村　清雲山　日歡寺
丹波國何鹿郡綾部　本光山　了圓寺
安藝國廣島　不老山　日光寺
國防國津濃郡桐山　日海山　秋林寺
長門國大津郡三隅村　昌樹山　了性院
播磨國姬路　大輪山　妙圓寺

以上

編者武く前掲中會津妙法寺見附玄滿寺と共に古何詠の三個寺。吉美妙立寺鎌倉本龍寺品川本光寺は用の三個寺と稱し何れも開祖日什大正師直建の道場にして別格本山の特禮寺なり又京都寂光寺妙泉寺は十六本山の列にして特待を受く

○

妙滿寺孫末（貳百九十三ヶ寺）
京新地本正寺末（十六ヶ寺）

武藏國江戶下谷竹町　圓妙山　本授寺
同　四谷南寺町　正妙山　法恩寺
同　小石川白山　本誓山　常檢寺
同　蕣司ヶ谷　東疆山　本染寺
山城國京高辻東洞院　正弘山　久遠寺
同　北野釋迦堂町　常在山　壽量寺
越前國福井石場　妙光山　本經寺
同　同　妙法山　善慶寺
加賀國小松東町　鳳凰山　本成寺
同　石川郡金澤泉野寺町　本明山　本覺寺
《中古事情あり宮谷本國寺預り》
同　長遠山　本長寺
同　寶林山　妙感寺

同　寶塔山　妙法寺　越前國足羽郡南居村　慶源山　妙正寺
同　英久山　法照寺　同　福井木田　羽久山　眞源寺
美濃國安八郡大垣舟町　妙經山　常陸寺　同　福井石場地藏町　壽榮山　正龍寺
加賀國石川郡泉野寺町　源入山　本光寺　同　丹生郡志津庄山内村　妙榮山　本行寺
京五條上行寺末（十二ヶ寺）
伊勢國員辨郡治田鄕新町　本行山　實成寺　同坂井郡金津古町　梅昌山　妙隆寺
若狹國遠敷郡小濱柳町　上行山　本法寺　同南條郡今庄　本流山　善勝寺
山城國相樂郡木津小寺町　本立山　妙樂寺　尾張國名古屋常德寺末（三ヶ寺）
尾張國愛知郡古渡村　見佛山　靈山寺　同　知多郡緒川村　喜林山　法道寺
武藏國江戸牛込　上行山　久成寺　三河國碧海郡刈谷　海量山　越境寺
大和國南都西新在家村　天眞山　本照寺　遠江見附玄妙寺末（一ヶ寺）　寶松山　長遠寺
和泉國大島郡車濃入町　經秀山　法王寺　尾張國名古屋長者町　廣居山　妙行寺
攝津國西成郡生玉筋　園林山　堂閣寺　遠江吉美妙立寺末（九ヶ寺）
越前國足羽郡福井石場　善立山　信行寺　三河國渥美郡野田村　抑橋山　法華寺
加賀國石川郡泉野寺町　常秀山　安立寺　同　田原城下　眞淨山　當行寺
越中國新川郡富山寺町　常秀山　安立寺　同　二川宿　延龍山　妙泉寺
丹波國桑田郡知見西畑村　法王山　本妙寺　同　吉田城下　運立山　妙圓寺
越前福井妙經寺末（六ヶ寺）　遠江國敷知郡太田村　豐立山　妙安寺

同　新生村　信忠山　妙經寺　會津若松妙法寺末（八ヶ寺）
同　坊瀨村　清立山　妙源寺　陸奥國會津甲賀町　實樹山　本行寺
同　濱名郡白須賀宿　安立山　妙泰寺　同所　瀧澤　實光山　妙國寺
武藏國豐島郡淺草　妙眼山　本立寺　下野國河内郡宇都宮寺町　久遠山　法華寺
伊豆三島本妙寺末（一ヶ寺）　出羽國置賜郡米澤梨鄕村　實樹山　本覺寺
伊豆國若澤郡三島宿　東澤山　安樂寺　同　砂塚村　御旗山　蓮藏寺
相摸小田原妙經寺末（一ヶ寺）　同　仙臺伊貝郡江尻村　惠光山　妙照寺
相摸小田原　妙性寺　武藏國駒込　法照山　顯本寺
武藏品川本光寺末（四ヶ寺）　同　淺草　恩田山　常林寺
武藏國品川　實光山　本榮寺
同　小石川原町　信弘山　本念寺
同　淺草　善福山　盛泰寺
同　新井宿　實光山　善慶寺
武藏淺草慶印寺末（三ヶ寺）
陸奥國二本松城下　妙法山　蓮華寺
同　所　大原山　本久寺
武藏國赤坂一ッ木　清水山　常玄寺
同　淺草淺茅ヶ原（預リ支配）　開佛菴

總本山妙滿寺の大法要

京都妙滿寺に於ては、四月十一日より三日間例年の稚兒音樂大法要を行ひ、國禱會、明治天皇十周年御忌、財團祠堂回向等を嚴修し、毎日三回午前午後に亘り說敎講演あり、本多管長猊下を初め全國布敎師數十名出演すべし、尙準備の都合あり、前記法要に參詣の人は四月五日迄に妙滿寺事務所へ豫め通知を希望す

思想問題

改造運動と信仰（承前）

文學士　武田顯龍

個人本位の思想は古く希臘哲學の時代からある思想だが近代になつて個人主義が最も顯著になつて來たのは十八世紀末十九世紀以後である樣である。抑も個人主義には二つの異つた潮流がある樣に思ふ。即ち其一つはシルレル、フンボルト、シユライエルマツヘル等に依つて唱へられたものであつて是は美的觀念を基礎として眞善美具足の美しき人格を構成すると云ふ事が眼目であります。從つて此の思潮は道德上の自我實現說と氣息相ひ通ずる思想であることは勿論ですが此の思想も總ての權威を無視すると云ふ近代的個人主義の特徵は備へて居るのであつて宗教にあれ道德にあれ古來の因襲的權威には反抗し是を無視するのであります。此の思想から出發して是を極端に押し進めて主張したのはニイチエであります。彼は宗教道德慣習法的權威等總ての因襲的權威に反抗し是を顚覆して新しき道德慣習の樹立を絕叫した。即ち基督教の博愛主義道德を弱者の爲に設けられたる道德であると罵つて强者の爲の道德を說き所謂超人の道德を主張して弱肉强食適者生存が道德的に妥當であるとなして遂に獨逸國民をしてカンプ。ウムス。ダーヴイン。と云ふ語を叫ばしむるに至り適者生存に輦を懸けて生存の爲の鬪爭と云ふことを認容せしむるに至つた。獨逸國民が這般現はした軍國的好戰的自尊傲岸の態度は實に此の思想に負ふところ大であると思ふ。

此の人格的個人主義から出發して自我自尊の個人主義に墮落した思想は我國にも傳はつて今日大に國民思想に害毒を流して居る。今日我國民が祖先の遺德を忘れ舊來の道德に反抗し宗教の權威を無視して神明佛陀の存在を疑ふ樣になつたのは勿論自然科學の發達及び產業的革命等其の原因は他にもあるが此の思想が與つて力あると思ふ。生存の欲求、自我の實現、人格の完成等は人間本具の欲求で是は否定することの出來ないのは勿論である。又自ら輕んずれば人之を侮どるとも云ふから自個の價値を充分に認め是を發揮することに努め叩頭是れ事とするが如き卑屈の態度を排して千萬人と雖も我行かんと云ふ自主的態度は必要ではあるが、度を過せば弊害百出するから心すべきことで要は中庸に存するのである。即ち自個の尊ぶべきを知つて國家を忘るるが如き態度は斷然排斥すべきであつて、自個の尊重と國家の尊重とが車の兩輪の如くなり人格の完成と國家の理想達成とが、二にして然も一でなければならぬ。即ち日蓮聖人の「仁義を制して身を守り國を安んず」と云ふ態度こそ吾人の學ぶべき態度であつて此の點から見て個人主義を根帶とする今日の改造運動には不贊成の意を表せざるを得ない。個人主義の今一つの潮流はマックス。スチルネル。キエルゴー等に依つて唱へられた利己的個人主義であつて是は道德上の快樂說と氣息相ひ通じ其の主張する處は强烈なる自我の意識に醒めて自己の完全なる解放徹底的解放を要求する點にある。此の思想が文藝上に現はれたものの中自分の知る範圍內で、最も著しきものは北歐の文豪イブセンの作ドルスハウスであると思ふ。彼の中に描かれて居るヒロインのノラが一度夫の個人主義的態度を看破するや愕然として自我に醒め家

庭を捨て子供と離れ夫を捨て自己個人の進路に向つて突入し全き自我の解放を叫んだあの態度である。此の利己的個人主義は其れ自體として今日の我國民思想に大なる害毒を流して居るが又此の思想は所謂自然主義と結び付いて所謂肉の解放となり極端なる享樂主義の叫びとなつてデカタンの思潮を誘致し一世を擧げて頽唐的氣分に浸染せしむるに至つた。

斯くて開化とは微化なりと云ふ地口を現實ならしむるに至つて玆に花柳病者に對して女子が拒婚同盟を結ぶの必要が切實且つ喫緊事なるを感ぜしめる樣になつた。現在の日本の位置と建國の理想とを考へたなら此頽唐的又は享樂的の氣分は斷然一掃すべきであつて是れ改造を要する最大事項である。以上大體に於て今日改造運動を論議する多くの人が其の出發點として居る唯物的な考方と個人本位の考方とに對する欠陥を述べ併せて改善すべき方法に就て多小卑見を加へて述べたのであるが改造の方法としては四恩主義でなければならぬ。四恩とは一には一切衆生の恩、二には父母の恩、三には國王の恩、四には三寶の恩である。

凡そ如何なる生物でも山男の樣に一人別世界に生存せんとするよりは密集的に生存する性質を有つて居る。多人數が密集して生存するとになると他の人と精神的にも物質的にも交渉を有つ樣になる。殊に人智が進めば進む程交渉が繁くなり交渉が繁くなれば繁くなる程人智は發達するものである。交渉と智識の發達とは相互關係にあるものである。吾人が一里の道を汽車に乘るのも一個の電燈をつけるのも僅か一枚の着物を着得るのも皆是れ人の恩に因ることであつて汽車汽船電氣の發明に或る學者は命を縮め或る者は先祖傳來の財產を失ひ妻子を路頭に迷はせ鐵道敷設汽船の運用の爲に或工夫は不具となり或は爲に命を失ひ船夫も亦同樣の境遇に陷り或は今日苦辛を嘗めつつあるのて是等の人の恩惠に因つて始て

吾人は汽車汽船に乘るを得、一枚の着物も着ることが出來るのであつて、人類全體は不知不識の間に精神に物質に兩面に於て恩を相互的に受け同時に與へつつあるのである。而して日蓮上人の仰せの如く恩を知らざる者は畜生に同じきが故に我等は此の相互的の恩即ち衆生の恩を報ぜねばならぬ。溫情主義と云ひ協調主義と云ひ慈愛の觀念と云ふが如き思想は皆其の出發點を此の衆生の恩に報ふると云ふ報恩觀念に出發點を有せなければならぬ。

若し然らずして可愛想だから情を掛てやるとか特別に救つてやるとか云ふ優者が劣者に對する態度て溫情主義協調主義を唱へるならば其は思はざるの甚しきものである、優者が劣者に對するが如き感情と思想とを根據とする慈愛の如きは極て不純にして一種の僞善である。多くの溫情主義者協調主義者が此の態度なるが故に所謂プロレタリアートは生存權を主張し勞働者は資本主の溫情を容れずして賃金の增加を權利として要求し果ては同盟罷工は權利なりと主張するに至るのである。貧者は富者より惠みを受くる事が貧者自身にしては恩惠を受けたのであるが富者に對しては富者自身の本然の責務たる報恩を果たさせたのであるから一種の恩惠である。一つの惠みと云ふ現象は富者貧者兩方相互的に恩惠であり報恩である。斯かる根據に立脚する時溫情主義協調主義は始めて眞の意義を發揮するとが出來ると思ふ。

父母の恩を報ずべきは論なき事て父母の恩を報ずると共に祖先の恩を報ずべきである、次に國王の恩であるが日蓮聖人が天の三光に身を溫め地の五穀に神を養ふ事皆是國王の恩なりと仰せられたが此の國王の恩を報ぜねばならぬ。國家の起原がトテミック時代にあるにせよ無きにせよ兎に角人間が集團的生活を營む以上今日の國家組織を成すは必然的傾向であつてヘーゲルの云つた樣に完全なる國家が人智の全文化活動の中心的實現てあつて、國家あるが故に

吾人の生存は全きを得是あるが爲に文化的生活を營ひを得るのであつて日蓮聖人も云はれた如く此の偉大なる國家の恩は碎身以て報はねばならぬ。殊に日本の如き建國の理想尊く八萬の國にも越え本有の靈山とは娑婆世界なり中にも日本國なりと云はれた此の日本に生れし吾人は大に國恩に報はねばならぬ。次に三寶の恩であるが宇宙絶對の佛の恩德や、宇宙貫串の大眞理の恩德や、是等の佛の恩德眞理の恩德を吾人に傳ふる聖者の恩德即ち佛法僧、三寶の恩德をば報ぜんければならぬ。正義公道の體現者權化者に對して恩義に感激し正義公道を己が規範とし正義公道の實行者宣傳者を敬ふことは吾人の當然の責務である。即ち釋迦牟尼を敬ひ法華經を身に讀み日蓮聖人を敬ふ事は我等當然の務である。聖德太子は三寶敬禮を治世の根本とした。改造運動は此の四恩主義に立脚せなければならぬ。然し四恩主義の理を解しただけでは駄目であつて改造運動には命懸けを要するから四恩主義に歸命する必要がある即ち此處に信仰の必要が起つて來るのである。四恩主義を內容とし要素として包含する信仰が根本となつて大正時代の改造運動をなされなければならぬ。如何なる信仰が正しき信仰なりやに就ては嘗て本誌に本多大僧正が佛教信仰の正系と題する御高說を載せられた樣であるから自分は玆には是を略する。（完）

記事

雪の北海道

國友日斌

統一國札幌支部發會式に本部より特派せられし序に、降り積む雪に馬橇を驅つて、北日本の各地に日蓮主義を宣傳する事數十回聽衆總數約二萬、左に梗概を摘記す。

○一月二十七日　盛岡市藤澤座に於て、『國民覺醒の秋』國友日斌『佛教信仰と水祭』田久保日城△同二十八日午前十時、八戸町本壽寺に於て聖誕七百年記念法要、同一時より講演『真教者の道徳』國友日斌『本佛の大慈悲』田久保日城△同日午後三時、八戸高等女學校に於て、『感激の情操』國友日斌△廿九日、吹雪を冒して青森大林區署に於て講演す。『感激と信仰』國友日斌△廿日朝札幌に到着す、銘旗を擁へたる統一團員百數十名に迎へられ、馬橇十數臺を驅つて同氏白石教會所に向ふ。午前十時、信徒百餘名の改宗式、午後一時、統一團支部發會式、午後七時より、公會堂時計台に於て大講演會開催、詳細は先發所報の如し△廿一日、月寒聯隊に於て將卒千五百名の爲に講演。『國民精神に就て』國友日斌△同日夜、白石教會に於て篤信の士女の爲に座談會△二月一日朝、小笠原氏宅に於て講話△同日午後、白石教會に於て信徒一同の爲に講演『人生と信仰』國友日斌、『日什正人師傳』田久保日城、△同日夜、中野氏宅に於て講演會『信仰と安心』國友日斌、『時代思潮と宗教』兒玉舜澄△同二日午後、巡査教習所に於て、『理想の國家』國友日斌△同日午後、札幌郡厚別村小學校に於て公開講演あり、兒玉舜澄師先發したりしが、猛烈なる吹雪の爲め汽車通ぜず、後發の國友日斌一行は札幌停車場より、夜の講演會場なる札幌區立病院に引返す、暖爐の火を圍むで屋外の風を餘所に、病める人と、看護の婦人とを相手に、夜更くるを忘れ、本佛の大慈悲は講師によりて、詳々と說かれたり、暖國には見られぬ、珍き集りなりき。『人の心と本佛の大慈悲』國友日斌△同三日、雪に人馬の交通絶えし中を踏て突破して、鐵道省苗穗鐵工所に於て、職工千六百名の爲に講演『精神主義に就て』國友日斌△同日夜、白石教會所にて座談會△四日朝、厚別村に於て講演會『修養と懺悔』國友日斌△同日午後江別法華寺に於て聖誕記念法要後講演『本佛の大慈悲』國友日斌、『日蓮主義とは何ぞ』兒玉舜澄△同日夜、岩田氏宅に於て、店員並に職工の爲に講演『須く心眼を開け』國友日斌△五日午後、札幌彫山氏宅に於て講演『愚學』國友日斌。同夜、信徒一同に送られて歸京の途につく、△六日午後青森地明會の爲に講演『日蓮聖人を憧ふ』國友日斌。講演後、紀親會並に求道座談會に夜の更くるを覺えず△七日午前、青森高等小學校に於て、教育會主催講演會、聽衆千名『國體の精華』國友日斌△同日午後、弘前小林區署に於て講演『巷に彷へる人に』國友日斌△同日、第八師團將校下士全部の爲に、弘前啓行社に於て講演『建國の理想』國友日斌△同夜、中村謙藏氏宅に於て、痛快なる座談會。同夜、弘前を發し東京に向ふ△二月十一日、名古屋に歸り、十二日、大垣市常盤寺に於て、聖誕記念法要及び講演『日蓮聖人を憧ふ』國友日斌△同十四日、東京大崎精工所に於て講演『國民精神に就て』國友日斌△同十五日、靜岡縣三島町重砲兵旅團にて講演。十六日、東京を發し、再び北海道に向ふ△廿四日。札幌白石教會に於て講演會『日蓮主義の信仰に就て』國友日斌△同日、鐵道集會所に於て講演『物質生活より精神生活へ』國友日斌△同日夜、中野氏宅に於て講演『殉教者に倣て興へらるゝ教訓』國友日斌△廿五日、木尾病院に於て講演『釋尊の出家成道』國友日斌△同日夜、札幌大學々生の爲に講演『宗教信仰の要諦』國友日斌△廿六日、白石小學校に於て講演『人の本性』國友日斌、同夜札幌を發し、青森に向ふ、廿七日、青森着、暴風の爲に、航海延期して、法華經は、制規の時間より數十分延着す、上陸後、晝食をとる暇もなく、市外一里半の第五聯隊の兵營に向ふ、將卒千五百名の爲に講演『我國體と國民精神』國友日斌△同日夜、

青森公會堂に於て、同地青年會の爲に講演。『改造と精神問題』國友日斌△廿日午前、青森縣現業員の爲に講演『人生の幸福と宗教』國友日斌△同日、青森郵便局に於て講演。『修養と感激』國友日斌△同日夜、職工集會所に於て、車掌二百名の爲に講演。『懺悔より本佛に』國友日斌。同夜十一時、急行列車の客となり東京に歸る。前後約一ケ月半、其間の壯烈と嚴寒の痛快さを味ひぬ、北日本の人は、情に感ずる事强く、能く泣き、能く笑ひ、能く動く、父母の家を離れ、祖先の鄉土を去つて、新開の土地に移れる人には、古き宗教に對する執著なく、因れたる因習の拘束なし、泣き笑ひ感じ、而して直に彼等は、其信仰を改め直に我等が、同志たり、思想戰上の勇士なり、大法を宣傳するに斯の如き痛快なる天地は他に多く類例を見ず、行かん哉〳〵、男子大業を成す、東北にあり、北日本の廣野は書んで君を迎へん、約四旬の旅行に於て、札幌に新寺を建立し、信徒百數十を得、青森と札幌とに、統一團支部を設立し、更に自慶會の巨手を延べて、靈天動地の活劇を演ずべき準備全く成る、乞ふ、括目して本年夏の頃を待て。

各地の思想戰

◎名古屋統一團　三月八日夜、常德寺に於て法華經要文講義を開催す。十數回に渉りし民衆教化の講義は、今夕を以て目出度講了せられんとす、されば一般民衆の來聽を促進せんとして、前夜記念講演にて、長谷川師を初めとして、今回新に編友醫正の弟子と成て來名せし川島常盟(松雄)及數名にて、辻說法を開始して、法華の眞價を知らしめ、併せて祝下の慈音に接せん事を懇願せり。果せる哉八日夜は、開會前より聽衆陸續として來會せり、祝下には滿堂の拍手に迎へられ、眼前一貫の妙法を講じ、次で法華經三部の最要義に就き無碍辯を以て、眼前一貫の妙法を開陳せらる。九日夜は、前古未曾有の祝下の法華經講義は、前夜にて講了せるを以て、三寶諸尊に對して、報恩の赤誠を言上し、併せて法運開發、國運隆昌の爲め、越裁祝下を大導師として、恭しく大法要を嚴修す。次で本經觀書要文の第一回講義を開催す、一般の來會者法悅極に歡會せり。

◎一宮分團、三月十日、一宮町歌舞伎座に於て日蓮主義大講演會を開催、聽衆六百餘名。『十界の事理と各國民性』山內先生。『佛教大觀』本多祝下。

◎四日市分團、十日夜、諏訪公園圖書館に於て法華經要文講義。

◎京都教報、二月一日、本山に於て國論會開催。『佛の敎』土持師△同二日、本山に於て護正會開催。『法蓮鈔開講』萩原部長△同八日、本正寺に於て二樂會講演。『正信と邪信』土持師。『人と敎』金光師△同八日、成就院に於て護正婦人開催。『奉祝聖誕七百年』有田師△同九日、正行院に於て正行婦人會開催。『婦人の修養』萩原部長△同十日本正寺に於て本正婦人會開催。『法華經の大意』金光師△同十三日本山に於て宗祖會修行。『心の財第一なり』土持師△同十五日、寂光寺に於て免囚保護講演開催。『知足安分』土持師。『社會生活の基調』有田師△同十六日、於本山宗祖聖誕七百年正當につき午前七時より記念慶讚法要修行後。『聖誕奉祝の精神』金光師△同夜、於本山講堂大講演會開催。『忍耐思想の發成』有田師。『統一の正樂』上田師。『日本國と法華經』萩原部長。烈寒降雪にも係らず來聽者五百餘名。同日の講演に對し法敵某より怪文字を連ねたる書狀舞ひ込み來る、此日の講演が如何に彼等法敵の頭上に一大敲撃を加へられたるかを、迷師の獻身的奮鬪を忍ばしむるに足る。△同十七日、於寂光寺開山會修行。『法悅に住せよ』萩原部長△同廿二日、於久遠寺常樂婦人會開催。『現代婦人の責任』土持師△廿五日、於本山開山會修行、本月は御正當に付特に盛大に執行せり。御開山の御一代萩原部長。

◎豐橋地方　二月十九日、於妙興寺立正會開催。『佛教の科學的解說』加來章證△　廿日、少年會開催、來會者四百名。『講話』加藤少將。『指環の大名』滿井文學士。『講談丸一大竹直治△同八日、於川田村講演。松本師出演△同九日、於宿本郷講演△同廿五日、於東濃名村公會堂講演、聽衆七百名。『戰や醜なり』松本師。『危險思想に就て』加藤少將△三月十五日、於濃名福祥三ケ日劇場講演會開催、聽衆一千名。『現代思想の基準』野澤少將△同夜、於同所小學校開催、有力者百五十名『國體の眞義』野澤少將△二月十一日、於二川町妙泉寺講演開催。『辛酉の年』松本師。『國民の覺悟』滿井文學士△三月廿三日、於二川町公會堂講演。『國國民敎化』長谷川氏。『改造問題の基礎』野澤少將。

◎靜岡縣下　二月十五日、三島町重砲兵旅團にて、國友醫正は『感激の精神』『人の心』。題下にて二回に渉り軍隊講演△同夜、於本妙寺講演會開催。『本佛の慈悲』川島師。『物質よりは精神』國友師△二月十七日、於見付玄妙寺聖誕七百年記念講演會を開催す、聽衆五百餘名。『最近の思想問題』野澤少將。『御聖誕に就て』石川一郎氏。『苦惱より悅樂へ』野澤少將。會當日は慶讚大法要を施行し、投餅の餘興ありたり。△二月十六日、於吉美小學校吉美村在鄉軍人青年會の爲に講演。聽衆五百名。『思想善導の方針』野澤少將△同日夜於吉美妙立寺本堂聖誕記念講演開催、來聽六百名。『宗祖御降誕の意義』岡本醫正。『苦より樂に』野澤少將△同十七日、於妙吉美惡津尋小學校生徒の爲に講演開催。『國王の恩と和合』野澤少將。

◎神戸のはちす婦人會　二月十三日、於統一團神戸支部婦人會開催。『所感』柳あい子。『婦人の天職』中原悲太郎氏。『日蓮門下の婦人』三崎稅務署長。

◎和氣通信　二月十日、於曾根稻山氏宅護法會開催。『佛神人の關係』原田日男△同十三日、赤穗郡石生村青年團慈會生活の目的』原田日男△同十三日、奏田郡林野町小林旅館にて白法會講演。『日女御前御返事』原田日男△同十五日、本成寺婦人會。『日蓮聖人の御降誕』原田日男△同十六日、於本成寺宗祖御生誕御祝會。『日本と日蓮聖人』原田日男△同十七日、於山田村天瀨公會堂講演。『宗祖御降誕と法華經』原田日男△同廿七日於本成寺開祖日什大正師御會式執行。『玄妙能化』原田日男△廿八日、於天瀨公會堂修養會開催。『會員と親』松本珍夫郎。『信念と結合』須波廣吉。『堅君の精神』原田越裁。

◎津山敎報　二月一日、於津山東松原牧尾氏宅同心會開催△同二日於津山上之町布敎所顧本青年會開催、能仁一十師出演△同十二日、同所に於て顧本婦人會開催。『婦人の修養』能仁一十師△極東日蓮研究會を高野村妹尾氏宅にて開催。『本佛敎ひ』山本駒一氏。『通俗佛敎大觀其十』能仁一十師△二十一日、高野村小學校々友會の爲に講演。『東西文明と國民道德』能仁一十師△廿五日、於津山公會堂美作青年同志會發會式の爲に講演。『信光一心』能仁一十師△廿七日、於田邑村小學校田邑村處女會の爲に講演。『樂しみと慎み』能仁一十師

◎千葉通信　三月三日、山武郡片貝村妙覺寺に於て、皇太子殿下御外遊祈願御安全の爲め國藝會『國藝』天崎師『國藝』大橋師△十日同寺にて聖誕記念法要後講演『佛力法力』大橋師『聖人の御生誕に就き』土藤師。

第一部監督布教戰報

□二月十日神奈川縣横浜長寺に於て『文明と宗教』武田文學士『生活の淨化』監督布教師山根僧正□同月十一日小田原妙經寺に就て『建國の理想』武田文學士。『佛教徒の理想』監督布教師山根僧正□同十二日、神奈川飯田本興寺に於て『立國の大義』武田文學士『立正安國の大旨』山根僧正□同十六日、宇都宮市法華寺に就て『日蓮道と國民道』(一)武田文學士『更賜壽命』(一)山根僧正□同日夜、同寺に於て『日蓮聖人の二方面』秋山布教師『日蓮道と國民道』(二)武田文學士『更賜壽命』(二)山根僧正□同十七日、福島縣二本松蓮華寺に於て『道昌へて國興る』武田文學士『人格の完成』山根監督布教師□同十八日山形縣梨郷本覺寺に於て『教は力なり』武田文學士『母日蓮』山根僧正□同廿二日、福島縣若松市妙法寺に於て『開深數行實悲涙』武田文學士『信仰の覺醒』山根僧正。

各地共皆聖誕七百年祀念法要最終後講演をなしたるお至る所滿堂立錐の餘地なき盛況にして思想戰勝利の凱歌街に野に響き渡るを覺へたり。

自慶會名古屋支部月報

○一月十五日、豐田織布搾切工場、聽衆二百名、『人の誠』山内先生、『女の道』國友文學士○同日、豐田織布菊井工場、聽衆二百名、『人の一生』山内先生『女の道』國友文學士○同日、機器製造所、聽衆五百名、『國民の覺悟』野澤少將○同十六日、豐田織機會社、聽衆一千、『人の一生』山先生、『心の働き』野澤少將○同十七日豐田紡織會社、聽衆一千名、『先づ謝恩の人となれ』山内先生、『安全なる生活』野澤少將○同日、日本車輛會社、聽衆六百名、『實際生活の方針』野澤少將○同日　菊井紡織會社、聽衆九百名、『婦人の修養と幸福』　山内先生、『柔と剛』野澤少將○同十八日、愛知時計會社、聽衆八百名、『大和民族の自主的精神』野澤少將○同十九日、中京裁縫女學校、聽衆三百五十名、『日本女子としての自覺』山内先生、『美しき感情』野澤少將○同十九日、淺野木工場、聽衆百名、『模範勞働者の心得』山内先生、『幸福なる生活』野澤少將○三月七日、菊井紡織會社、聽衆五百名、『感孕』國友文學士『男女合方の關係』山内先生○同月、山岸製材會社、聽衆三百五十名、『佛天祖覺』山内先生、『人民道德と勞力問題』本多稅下○同八日、中京裁縫女學校、聽衆三百名、『感激の精髓』國友文學士『精神修養の大要』本多稅下○同日、三菱内燃機會社、聽衆二百名、『理想の勞働者』本多稅下○同九日、豐田本社、聽衆一千名、『感激精神』國友文學士『修養は感ずるにあり』本多稅下○同日、日本車輛會社、聽衆一千名、『理想の勞働者』本多稅下○同十一日、專賣支局、第一回女工千百名、『修養の大要』本多稅下、第二回男工四百名、『理想の勞働者』本多稅下○同日、機器製造所、聽衆六百三十名、『理想の勞働者』本多稅下○同十二日、淺野木工場、聽衆二百名、『感激精神』國友文學士。

統合宗學林學監
統一團總務　僧正　井村日咸述

日蓮聖人の宗旨

本書は著者が統一團青年會員の爲に口述し雜誌『統一』誌上に連載せられたる日蓮聖人教義綱要の總論を整束したるものにして日蓮主義を最も平易簡明に記述し其要領を會得せしめたるものなり、茲年日蓮聖人降誕第七百年報恩の爲に之を上梓し初版は著者存緣の道俗に法施したり、今回此を再版に附し施本用には特價を以て汎く之を頒賣す、希望の向は本團に御申込を乞ふ。

大正十年四月

日蓮聖人御影壹葉
三六版七十六頁總ルビ
壹部定價金拾五錢也
施本用　五十部以上　拾四錢
特價　百部以上　拾參錢
三百部以上　拾貳錢
五百部以上　拾壹錢

發賣所　東京市淺草區北清島町十四番地　統一閣
電話下谷六三一〇番
振替東京一二一九番

求道者の一大福音

主幹宮澤英心師謹講

法華經講話錄發行

佛教を信ずると信ぜざるとを問はず法華經の名を知らざるは無い。然れども之を理解する者に至つては極めて僅少である。古來法華經の講義註釋多しと雖も多くは專門的にして、到底普通人の智識に逗會せず、爲に渴仰羨望し乍らも遂に研究を斷念せしむるの不幸を見る。是れ我が佛教界の爲め將又求道者の爲め惜むべき事なり本會は茲に鑑みる所あり從來發行し來りし『唯一』誌を改めて、其內容の殆んど全部へ法華經講話を掲載し、本年一月より約二箇年半の豫定を以て妙經全部を謹講し、以て一般求道者の研鑽に供する積りである。講話の方法は全部口語體にし通俗平易を旨とするから、何人が讀まるゝも領解に苦しむ憂ひは無からう、今や日蓮主義の勃興の機運に當り、そが基礎學たる法華經講話の掲載さるゝは、恰も大旱に雲霓を見るが如きものである。敢て江湖の求道者に愛讀を勸奬す。希望者は半箇年若しくは一年分の會費御送金になれば直に送本す。送金法は本會の振替口座を御使用下さるが最も便利。希望者は初號より申込ありたし。

發行規定
- 毎月一回二十日發行
- 會費一箇月金三十錢
- 體裁優美菊版形
- 六箇月分　壹圓八拾錢
- 壹箇年分　參圓六拾錢
- 郵稅不要　總て前金の事

發行所　大阪市南區難波芦原町　振替大阪一六四八一番　日宗唯一會

求めよ今の內に之を

統一閣增築寄附金申込連名

金壹千圓也及記念染筆四百枚　本多日生
金六百圓也及記念福引三百點　早川太吉
金五百圓也宛　安川繁穗　同　滋子　安川末子
金參百圓也及大時計壹個　內海頴二
金參百圓也宛　時友儀次郎　玉川由太郎
金貳百圓也宛　井村日咸　久保田雅己
金壹百五十圓也宛　大原亮　山田豐次郎
金壹百圓也宛　山田英二　井上直太郎　市川榮吉
濱田瑞　長谷川要之助　星野鮫子
小原正恒　中村光三郎　中澤平五郎
矢野茂　山木嘉七　福原豐次郎
後藤秀太郎　齋藤良太郎　水野三太
三宅於利藏　宮原六郎　島田德五郎
自度會　藤岡甲松　鈴木金藏
金六拾圓也　柳澤久子　佐藤梅太郎
金五拾圓也宛　伊藤キク　岩野直英
井上龜太郎　井上清純　五十嵐正
林田芳太郎　長谷川喜造　大西橋三
小川吉助　勝田茂　吉田珍雄
竹下龜太郎　津田直明　月岡茂作
長山一郎　中山昌治　中村壽市
中村清一　野島運平　窪田貞二　須田友吉
福田喜平　小泉榮之助　踏見花蹊　福田金一郎
雜賀秀太郎　同　春子　坂本泰造　金拾八圓也
宮岡直記　正法護持會　廣瀨瀧次　金拾六圓六拾七錢宛　勝山いし　加藤乃衛
關涙虎吉　駒澤しげ
金四拾圓也　林喜兵衛　金拾六圓五拾錢也　宮崎靜馬
金參拾圓也宛　石井清一郎　林部熊作　金拾五圓也宛　大熊仁三郎　小倉規矩
西尾伊太郎　西山吉五郎　若林よね　塚越銀次郎　山本政次郎　山地春吉郎
酒井常藏　加藤貞五郎　遠野清七郎　愛下章一　笹木貞意
津口藤三郎　松本有信　有住千代子　金拾貳圓也宛　猪俣金太郎　長谷川孫助
佐藤艷子　佐藤己之吉　佐伯平三郎　國行季雄
宮岡ふき子　杉本竹之助　住江タケ　金拾圓也宛　市村けい　井上定次郎
鈴木信愛　石原應恒　原喜造　馬場幸七
金貳拾圓也宛　山中國次郎　長谷川德太郎　林啓次郎
石川芳松　飯沼鬼一郎　岩本銀次郎　日蓮主義青年團　西村正　西村さだ
本間寧夫　友成龜雄　友廣善夫　豐田德太郎　富田練三郎
大谷儀次郎　小關三平　和光米房　富田こと　大友善平　大谷說子
加藤重太郎　龜井利一　笠森艷子　太田兵吉　鹿戸よし　岡野八右衛門
鹿島喜三郎　高橋辰二　高山喜三郎　岡野アキノ　荻野慶三　渡邊源次郎
高木作太郎　竹內太八郎　內海夏子　渡邊雪子　和田啓子
野元盛幹　久保田久子　山木藤太郎　周奈錠作　川原藤子　金澤巖
福原爲　榎本源之助　淺野良吉　金指龜吉　米倉善吉　橫田儀助
齋藤リエ　木村義明　妹尾勇太郎　橫山喜助　吉田力作　吉田芳緒
吉田ふさ　竹井平助　高木利兵衛

田中米吉　田村範周　段家文二
塚越ふみ　中村藤吉　中山長明
中澤こつや　長谷勘次郎　村上精一郎
植松義太郎　氏家仙蔵　野村喜作
野口夏江　墨崎竹三郎　墨須源太郎
國友久子　山内操子　矢吹幸吉
矢代太郎吉　安江清海　安江久子
安江和平　松永賢蔵　松下親業
松本源七　藤澤智明　藤井あさ
五島保吉　古作勝之助　高尾與三
阿部きく　阿部秀三　赤松章
厚木ひで　秋谷忠七　秋山萬吉
秋田愛子　新實德太郎　浅尾すゞ
坂井德之亟　齋藤四郎　佐藤裂裟吉
匂坂勝蔵　木村雄　三村友藝
三浦孝一　三浦まち子　島田兼三郎
島本龍太郎　清水萬蔵　平木助太郎
久富久子　關口春吉　須藤貞吉
杉山民次郎　鈴木なを

金六圓也宛

井上倫吉　信田幸太郎
津田清吉　久保田喜七　山岸亘吉
木村雄太郎　白井鬼喜　遠藤長蔵
結城吉郎　猪又幸蔵　岩井庄三郎
花井時次郎　富岡才次郎　高田保太郎
内田四市郎　小林銀次郎　安藤林平
宮澤種吉　鳥塚兼吉

金五圓也宛

伊藤松三　伊藤竹三郎
石川景蔵　石川松吟　戸村太三郎
戸村啓蔵　千種新八　大竹愛子
大友のぶ　大森虎之助　尾野宮一
鳥阪儀三郎　川島清三郎　亀井章次
横田やす　立川長重　高橋義章
高見とめ　田川金太郎　坪田五兵衛
土屋げん子　土屋良八　中村清作
中澤龍夫　村田新之助　上原市太郎
墨田辰五郎　墨木熊次郎　墨木定次郎
山本常松　山口俊和　山鴻美代喜
山崎あき　山崎晴夫　安江信子
安江治子　安江喜代子　安江勢子
安江逸平　安江茂　松林忠永
松田利勝　松崎操　毛見熊太郎
毛見勝　福田馬之助　小牧喜平治
近藤神江　新井巳千雄　新居いさ
櫻井文三郎　齋藤丑蔵　齋藤眞治
勢經寺義雄部　宮岡みよ子　三宅たけ子
水野喜三郎　柴崎守雄　鳥本あき
鳥本れい　鳥本ひろ　鳥本正
神義徴　遠藤きん　村田三之助
森義觀　森下清一　聖城秀章
吉村民三郎　西澤明善

金參圓也宛

西山正一　殿岡眞　近山作三
川瀬忠次　金阪大次郎　内藤藏一
墨木豐太郎　安室喜左衛門　松本知之
丸橋治太郎　坂和きよの　平木福三
無名氏　同　上　伊藤上下松
石川秋重　加藤鋪次郎　内藤慶次郎
小室金蔵

金貳圓也宛

伊舟よし　岩瀬すゑ
石川宇市　吉田貞次郎　高橋大吉
保井保五郎　見玉小次郎　雨宮訪
葦澤じゆう　三浦善積　清水直子
杉崎鐵三郎

金壹圓五拾錢宛

高橋四郎　宮崎喜弘

金壹圓也宛

乾幸三郎　乾桂三郎
石川悦太郎　西村小平　金田盛太郎
田村謙　内藤篤　藤江甫
矢作鶴尾　山中なつ　山岸勇
安井源吉　齋藤鎗作　平岡市太郎

金五拾錢也宛

村田富次郎　日暮平太郎

以上申込合計金壹萬七百八拾九圓五拾錢也

統一閣擯築費收支決算報告第一回

但收入は大正十年二月二十日現在
支出は同年一月廿五日現在なり

收入

一金壹萬貳百六拾九圓七拾五錢也　收入總額

内訳

金壹萬貳百拾圓七拾五錢也　寄付金收納濟高
金五拾九圓也　落成式志納金

支出

一金壹萬七百七拾七圓五拾四錢也　支出總額

内訳

金七千三百七拾九圓八拾錢也　新築費
内金六千圓也　擯築廿五坪建築代金
金千九拾八圓四拾錢也　腰掛四拾脚及板敷代金
金百拾貳圓七拾錢也　禮子障子等建具代
金貳拾貳圓七拾八錢也　電燈工事費
金百四拾五圓九拾錢也　下足場新築費
金參千五拾六圓參錢也　營繕費
内金千七百圓也　舊館營繕大工受負金
金參百五拾圓也　同室内外ペンキ塗代
金參百五拾圓也　同家模營營繕代金
金貳百六拾七圓九拾壹錢　掲示場物置等營繕代
金八拾八圓參錢也　建具直及禮子營繕代
金貳百參拾參圓拾九錢也　疊表替代金
金參拾七圓廿九錢也　水道工事費
金拾八圓拾壹錢也　電燈營繕工事費
金拾壹圓五拾錢也　植木取片付費
金壹百拾貳圓七拾四錢也　諸雜費
内金六拾貳圓五錢也　動幕駄印刷費
金拾五圓九拾七也　同上郵送費三回分
金拾五圓八拾錢也　賣葉紙二百枚
金拾八圓九拾貳錢也　諸雜用費
金貳百貳拾八圓九拾七錢也　落成式費用合計高

以上收支差引金五百七圓七拾九錢也不足金
右不足金は寄附金收納迄幹事に於て立替支辨す

統一團賛助會大正九年度決算報告

收入

一金參千參百九拾壹圓參拾參錢也　收入總額

内訳

金七百八拾四圓九錢也　前年度繰越金
金壹百八拾壹圓也　新年會費收入
金五拾壹圓六拾錢也　釋尊降誕會志納
金拾壹圓也　同宗會志納
金壹百壹圓五拾錢也　尼港遭難追悼會
金壹百六拾圓四拾錢　御會式志納
金壹百圓也　大原亮君臨時志納
金八拾八圓也　其他志納
金四百九圓四拾錢也　賛助會費收入
金壹千五百四圓參拾四錢也　書籍賣上代金

支出

一金參千參百五拾九圓拾七錢也　支出總額

内訳

金貳百八拾八圓廿五錢也　新年會費用
金八拾七圓也　釋尊降誕會費用
金五拾六圓六錢也　同宗會費用
金貳百四圓七拾錢也　尼港遭難追悼費
金壹百五拾九圓八拾八錢也　御會式費用
金貳百七拾四圓四拾錢也　印刷費
金五拾參圓五拾壹錢也　通信費
金壹百六拾八圓五拾錢也　青年會費用
金五拾七圓七拾錢也　幹事會費用
金壹百六拾四圓九拾錢也　下足及書除費
金壹百六拾五圓也　給料及手當
金壹百貳拾六圓九拾七錢也　消耗品費
金貳拾四圓也　什器費
金參拾壹圓貳拾錢也　雜費
金壹千四百九拾七圓拾錢也　書籍仕入代金
何上收支差引金參拾貳圓拾六錢也剩餘大正十年度に繰越す
右決算之通り相違無之候也
大正十年二月廿八日　統一團幹事

日蓮聖人銅像建設趣意書

民衆教化の必要今日より急なるは無く就中都市の住民に於て特にその緊切なるを覺ゆ而して東京市に於ける民衆の集合地は淺草公園を以て第一と爲す若しこの淺草公園に集散する民衆に對して日夜に何等かの教化を與ふを得ばその影響する所必ずや多大なるものあらん此に於て乎同志相議し理想的なる日蓮聖人の銅像を建設せんとし地を十二階附近元慶印寺跡に卜し工を斯界の大家岡崎雪聲氏に托し本年中を期してその工を竣らんとす慶印寺は不惜身命の行者日經上人の開創する所今や市區改正の爲めに牛込原町に轉じ跡地は新天地と稱して民衆娯樂の地たらんとす茲に靈地の湮滅を慨きその中央の地を淨めて偉聖日蓮の銅像を建設せんとするなり時恰も偉聖降誕七百年に相當するを以て記念事業の一としてこの擧を世間に推奬し清淨なる喜捨を得て大善功德を分たんとす由來東京の住民は日蓮崇拜の精神頗る旺盛なれば偉聖の風貌に接し觸目禮拜の間に日蓮の如き剛健、感恩、慈愛、熱誠、抱負、信仰、法悅、滿足を得又立正安國、知法思國、大義名分、父母孝養、衆生相互恩、開顯統一、皆歸妙法の大精神に感孚するあらばその效果蓋し尠少ならざるべし日蓮聖人曰く日は東より出てて西を照す日出づれば星隱ると大方の士女淸き一片の贊同を寄せられんことを

時大正十年二月吉祥日

發起人（順序不同）

陸軍大將　大迫尙道　宮原六郎　玉川由太郎　山田英二
海軍中將　宮岡直記　加藤信義　久保田雅己　龜井利一
陸軍少將　小原正恒　三浦大五郎　五十嵐正
陸軍少將　野澤惟吾　木橫利平　內海顯二
海軍造船少將　岩野直英　本門宗總監　井上日光
深川妙壽寺　石田顯隆　顯本法華宗管長　本多日生
海軍大將元帥　東鄕平八郎　日蓮宗管長　河合日長
法學博士　筧克彥　島民會理事　龜岡豐二
衆議院議員　金光庸男　覺王山信徒總代　加藤慶二
國柱會總裁　田中智學　陸軍中將　高橫義章
法華宗管長　津田日彫　前大審院檢事　矢野茂
自愛會理事　安川繁雄　愛知縣市部會議長　山田才吉
警察講習所長　松井茂　海軍少將　松本有信

贊成者（イロハ順）

文學博士　井上哲次郎　陸軍大將　井口省吾
法華宗管長　藤平日學　海軍造船中將　福田馬之助
陸軍中將　福田雅太郎　諸會社重役　深見榮太郎
海軍中將　佐藤鐵太郎　本妙法華宗管長　清瀨日守
貴族院議員　木內重四郎　本門法華宗管長　木村日舜
文學博士　白鳥庫吉　衆議院議員　望月小太郎
本門法華宗總監　森智孝　株式仲買委員　鈴木常吉

工事設計

一日蓮聖人御銅像　壹基

一立像高さ壹丈貳尺銅鑄（高さ八寸二分八角形直徑四尺五寸）を添へ上等研磨仕上げとす

一臺石高さ壹丈四尺寸寸多木產花崗石圓面通り水磨とす、地形は松生枝貳間半物を打詰め方貳間厚さ五尺コンクリートを打ち基礎石を据へること

一瑞垣は稻田產花崗石を以て圓面通り微塵叩き仕上と爲す扉は鑄物とし禮拜石を据付け內部は割栗地形の上にコンクリートを打堅め、總てモルター塗仕上とし、表面へ多摩川砂利小粒厚さ壹寸通り敷くこと

工事豫算

一金參萬七千參百圓也　經費總額

內譯

一金五千五百圓也　原型製作料圖案より五分の一雛形壹個壹丈貳尺本原型壹體石膏仕上まで諸費

一金九千五百圓也　鋳造より仕上までの職工人夫諸給料原料薪燃其他消耗器具器械費

一金壹萬參千圓也　臺石工事一切の費用

一金四千圓也　瑞垣工事一切の費用

一金壹千八百圓也　運搬据付足場掛其他の諸費

一金參千五百圓也　周圍樹木費地鎭式諸費　除幕式諸費　事務所費　其他雜費

寄附行爲規定

一、寄附金は多少を問はず之を受納す寄附金は事務所へ申込次金あり たし但數回に分納せらるゝも差支へなし

二、寄附金の送附は可成振替口座東京四四三〇三番日蓮聖人銅像建設事務所へ振込ありたし

三、寄附者の芳名は卷物に錄し銅筒に入れ臺石中に收む

四、寄附金申込終了期を本年七月三十一日とす

五、寄附金豫定工費額以上に達したるときは發起者會の議に附し保存費並に民衆教化の費に充つ

六、寄附金豫定工費額に達せざるときは不足額は發起者中に於て之を敎弗すべし

七、會計擔任者は發起者中の加藤信義、宮原六郎、玉川由太郎とし寄附金に對しては會計列名捺印の受領證を差出すべし

以上

東京市淺草區北清島町統一團內

日蓮聖人銅像建設事務所

四日市市安樂寺創立寄附者芳名

（第一回報告）

貳千圓	本多日生	拾五圓
數地參百坪	山路元吉	貳拾圓
壹千五百圓	岡人	拾五圓
參百圓	東京市顯本法華宗宗務院	五百圓
參百圓	名古屋市國友日斌	參拾圓
貳百圓	京都府綾部武聖鱗	參拾圓
百五拾圓	東京市安川繁雄	參拾圓
百貳拾圓	佐藤りう	拾圓
百五拾五圓	池上常次郎	六拾圓
五拾五圓	東京市野口日主	參拾圓
拾五圓	同市井村日成	參拾圓
百貳拾圓	東京市今成日晉	參拾圓
參拾圓	中島金太郎	五拾圓
拾圓	服部たか子	參拾圓
參拾圓	同市笹川日堂	六拾六圓〇八錢
貳拾圓	同市大森日榮	五拾圓
拾圓	同市森川日修	參拾圓
百貳拾圓	同市鈴木日雄	五拾圓
拾圓	同市石川顯隆	五拾圓
五拾圓	同市木村日保	拾圓
拾圓	同市山根日東	參拾圓
參拾圓	名古屋市草切信榮	拾圓
參拾圓	同市南波喜太郎	貳拾圓
拾圓	同市山口春吉	參拾圓
貳拾圓	同市高木順吉	參拾圓
拾圓	同市吉永義彦	拾圓
五拾圓		拾圓
拾圓	京藤義應	拾五圓
拾圓	長谷川日濟	貳拾圓
拾圓	墨頭玄	拾五圓
拾圓	長美明	五圓
參拾圓	山路すへ	參拾圓
參拾圓	兒玉こう	參拾圓
參拾圓	和氣原田勇	參拾圓
參拾圓	名古屋市加藤勝市	參拾圓
參拾圓	山口トメ	參拾圓
參拾圓	同市山口ハル	六拾圓
參拾圓	柴崎村春長七	參拾圓
拾圓	坂平一	拾圓
拾圓	日置源市	五拾圓
參拾圓	平井米吉	參拾圓
參拾圓	青木榮太郎	參拾圓
參拾圓	鈴木かく	拾圓
參拾圓	齋藤慈次郎	六拾圓
拾圓	吉田直一	六拾圓
拾圓	山路美之助	六拾圓
五拾圓	東京市正法護持會	六拾圓
拾圓	久留米市中原通座	五拾圓
參拾圓	田口久松	參拾圓
拾圓	坪永日監	參拾圓
拾圓	水村義明	拾圓
拾圓	池澤日長	拾圓
參拾圓	上田智量	參拾圓
五拾圓	伊藤慈五郎	拾圓
三拾五圓	關田日城	拾圓
拾五圓	富田林惠	拾圓
貳拾圓	松尾清明	拾圓
拾圓	東京市南波はま	拾圓
五圓	津山市能仁十一	拾圓
參拾圓	京都市藏原日道	拾圓
拾圓	同市金光孝頭	拾圓
參拾圓	同市有田安道	拾圓
參拾圓	神戸市熊井本光	拾圓
貳拾圓	千葉縣武田顯龍	拾圓
拾圓	豐橋市松本堅晴	拾圓
五拾圓	堺市村上うの	拾圓
五圓	明石市川崎英照	拾圓
拾圓	名古屋市清水一乘	拾圓
參拾圓	寫井市石井宜俊	拾圓
拾圓	松井常善	拾圓
六拾圓	坂庄作	拾圓
拾圓	加藤濱太郎	拾圓
拾圓	松井さく	拾圓
六拾圓	伊藤松次郎	拾圓
六拾圓	細田米ハル	拾圓
六拾圓	內田水藤	拾圓
五拾圓	佐藤順吉	拾圓
拾圓	字佐美富吉	拾圓
參拾圓	字佐美寫松	拾圓
參拾圓	高田三吉	拾圓
拾圓	高田なかはる	拾圓

○法華經の心髓　本多日生猊下著書一覽

○日蓮主義初步　金壹圓六拾錢

○日蓮主義　金七拾錢

○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢

○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢

○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢

○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢

○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢

○日蓮主義の運用　金貳圓貳拾錢

○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢

○國民教化　金貳圓貳拾錢

○法幢　金貳圓貳拾錢

○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢

○思想問題の歸結と法華經　金貳圓

○聖訓要義　卷一、二、三、四、五、壹部金貳圓貳拾錢　卷六、壹部金參圓

○開目抄詳解　上卷一部金貳圓八拾錢

○聖語錄　金貳圓八拾錢

○優婆塞戒經通解　金八拾五錢

○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢

以上各送料一部金八錢

○法華經講義　上卷下卷各一部金參圓四拾錢　送料一部金拾八錢

○大藏經要義　一卷近刊　送料一部金拾八錢　十一卷近刊　送料一部金十八錢　今年前金送料不要

○法華經要文　上製金五拾錢　差製金參拾錢　送料一部金貳錢

○思想の惡化善化（人類文明の基礎）　各一部金六錢百部以上金五錢の割　送料一部金貳錢

○正しき理解と信念

○日經上人の功動

○日蓮上人降誕七百年一部金拾錢郵稅金五厘

以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし

東京市外品川町妙國寺內

大藏經要義刊行會

振替東京三一五九六番

統一定價	
一冊	金參拾錢
一ケ年	金參圓參拾錢

送料一錢
送料共

廣告料

一頁	金拾圓
半頁	金六圓
四分ノ一頁	金參圓半

前金の事

大正十年三月廿七日印刷納本
大正十年四月一日發行
（第三百十五號）

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人　國友日斌
印刷人　鈴木日雄
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所　振替東京五一〇七一番
名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常德寺內
統一編輯所

不許複製

目次

健全思想とは何ぞ（法體）……本多日生
一、健全と不健全……二、裁判の標準……三、疾病同源……四、現代の病弊……五、宇宙觀と健全思想……六、人身觀と健全思想……七、國家觀と健全思想……八、人道主義と健全思想……九、社會觀と健全思想……十、富者の反省……十一、貧者の病弊……十二、貧富互助の社會
教育勅語と思想問題……本多日生
本教祖書要文講義……本多日生
日蓮聖人教義綱要……井村日威
宗門・史料……山根青村
社會改善と宗教の價値轉換……兒玉常宣
記事報道十數件

第廿五年五月號